

動脈からあふれ噴いたかのような濃紫の Crimson Red、人工的な濡れ光沢を帯びて生々しく鮮やかな表面を持つ合成樹脂の繊維のような半透明の素質の奥底に玄く燠火のごとく烈々と滾る昏鬱の赭みを孕み、蛋白質性の物質塊とはおもえぬ色彩の諧調。

薬品性の強い染料で緋色に染め、いつも濡れているかのようなビニール製の色艶を持つ髪をかき上げる。

気取って顎を上げ、鏡に映った自分を細めた睥睨の眼差しで見た。

古典劇の舞台俳優のようにシルバーのブレスレットをわざと大仰に鳴らして腕を振る。その指尖でギターのパグを回して弦を調整するためだ。

夏の日射しに炒られ、光を反射させるペグにも、その髪を肩まで垂らして落ちるがままに鎖骨の上に渦巻かせる自分が映っている。鍍金された金属、即物的な質の燦めきがあり、無慈悲にあらゆる正論を虐殺して人を恍惚とさせる非情性が鎮座していた。

「ふ。美しい。」

魅せられるぜ、このマテリアルな感覚。これを理解できる俺が特別の存在でないと妄うことがあるがわからない。

叡智と云うものは神の寵愛だ。言葉にならない。価値も本質もない。素敵だ。くどくどしたうざい文句には反吐が出るからな。

このリアリティ、ちよつとやそつとじゃ手に入らない。音と同じだ。つかんだ瞬間に掌からは消えている。だから駆られ、音楽があるんだぜ」

フィンガー・ボードには目をやらずに速く指を走らせ、即興する。弦の震えがピックアップに伝えられ、電気信号に変換され、プラグ・コードからエフェクターを経由し、歪んだ爪弾き音に変じ、マーシャル・アンプから響き上がった。硬く乾いた、物質的な音だ。

唇だけで作る、歪んだ笑みを独り泛べる。その表情は彼の脳裏で嘶らかにイメージされ、為されたものだ。この乾いた音の硬さはピックアップの位置を高めに調整して弦に近づけた結果でしかない自嘲しながらも、こんなふうに自嘲することのできる自分の優越性を鑑賞する、微苦笑の笑みである。

初めて試みたオープンDチューニングであった。弦を押さえない状態（開放弦）でDのコード（D・F^レ・F^{シャ}・A^ラ）を構成するように調律することだが、演奏に際しては指の運びが普段とは異なってくる。音触も微妙に違う感じがする。試しにいくつかコードを鳴らしてみる。

「もつとだ。満足できない。」

この弦を引つかく音をF1マシンの唸りのように猛猛で、機械的な非情性を持った無機質な爆裂音にしたいぜ」

考えていたリフをいくつか試してみる。一つの曲の中で主題的に繰り返される伴奏のフレーズのことだ。古くはザ・ビートルズの『Get Back』やデヴィッド・パープルの『Smoke On The Water』などのリフが有名だ。

イタルは太突した肩をそばだてて弾いた。硬くて平べったい胸板から流れ落ちるラインは凹んだ腹で大きく内側に湾曲している。背には萌え始めた翼のように突起した肩甲骨の盛り上がりがあり、その弓なりのラインは外側に湾曲する背骨の曲線ラインに繋がり、胸板から腹筋へと挟れ落ちるラインとは微妙な、ユニゾンともハーモニーともつかぬ相応類似のニュアンスを醸していた。肘や膝も尖ってカリカチュアのように全体に見える。演奏を止め、それらを緩め、憂いを帯びた芸術家ぶりの吐息をする。

真夏の日射しに眉を顰めた。

絶対的な権力を持った皇帝のように緋髪を振って細長い首をねじり、窓の外を見る。白っぽく乾いた校庭の土が熱気に揺れていた。敷地を囲むコンクリートの塀に沿って植えられた樅や樺の本々が校舎から正門へと続く通歩路に深い日陰を与えている。

路にいく人か同年の女子たちが出て来ていた。賑やかに喋っていた。イタルの眼は一人を見つめていた。それは彼の諸感覚を氾濫させるなにかだ。イタルの感覚を精緻な論理で計算された構造によって驚嘆すべき精度で濫用させた。

楽夏が歩く。鼻と上唇とを失らせている。シャンパン・ゴールドに燦めく髪。小麦色の膚で、制服姿に飾りのないビーチ・サンダル履いた素足。それが男子の眼を惹くことを計算し尽くした選択だ。

靡く髪から次々と零れる光の燦めきや真つ白いブラウスのひらひらした半袖が做す微妙な襞は彼にとつては古典期のギリシア彫刻のように美の規範カノンとしてイデアの世界から舞い降りたに等しかった。それは彼女の人格に關係なく、独自の存在であり、時の中に永遠性を留め、彼に無限なる妄想の膨らみを与えるイマジネーションのアーカイブであった。

楽夏は地中海の色に似たコンタクト・レンズをしている。その双つの眸は蝶々の装飾が附されたラピスラズリのアンティーク・ジュエリーのようなだった。マスカラに延長されて大きく反った睫が蝶の触角であり、グロスの燐光を放つ瞼が羽根で、南米の鮮やかな蝶々がラピスを飾るかのように見えるからだ。

あたかも宝飾で作られた聖なる紋章であり、その中央で眸の虹彩が做す放射状のデザインは太陽コロナのごとくに瞳孔を囲む聖なる剣のようであった。

現代的な意味での哲学ではない、古代の真理であり、人間が森羅万象に対して無意識的に期待する正理明敎なる本質性を牽き裂いて嗤笑する、粗暴な、人情など一片も持たない、暴力的な実在である。それは一つのFORCEだ。

イタルにとって彼女は生きている陀羅尼^{ダラニ}であった。森の奥深く、磐に刻まれた解説不能の古代文字だ。今でも午前一時には魑魅魍魎や^{インバース}地霊や^{インバース}魔神やらが光芒とともに現われる、いにしへの魔法陣であった。

その未成熟な細さを残す手脚、活き活きと双眸を動かす様子は象徴であり、彼女と云う人間に全く関係なく或る種の活字であり、現代に姿を借りながらも理性を嘲り侮蔑する乾燥地帯の女神であり、イタルを脱分極化させて発火現象とする秘儀書ワパニシャツドである。

楽夏と云う名は発火のための記号に過ぎない。その歩み、造形、揺らぎ、色彩、視覚に訴える触感の香気など、それら一切は光燦であり、イタルの現存在においては神から齎された聖なる、典籍上に列なるラテン語の文字であった。金箔の上に荒々しく残された墨痕のように現実的であった。

彼女は聖妻女でもなければ偉大でもない。その象形が魂の救済者たる聖なる偶像であった。神の手になる秘蹟であった。

イタルは深く歎息し、瞑目する。そしてリビアのアテナを脳裏に現象させる。

リビアのアテナとはなにか。すなわちギリシア神話における智慧と戦闘との女神として知られるアテナはその起源の一つに南方渡来説を持っている。リビアのトリートニス湖の辺で生まれクレタ島に渡り、次いでは現在のギリシアの首都であるアテネに定住した、と云う説がそれである。

通常はアテナと言えば白皙の女神像を思い描くが、その説に従うならば褐色の処女神^{アテナ・パルテノス}アテナを空想せねばならない。眦のくつきりした黒い巻き髪のパラス・アテナ。

史実においても紀元前四〇〇〇年頃からリビア人のクレタ移住が始まり、エジプト第二王朝の時代であった紀元前二〇〇〇年頃にナイル川の西方のデルタ地帯から女神信仰を持ったリビア人らがクレタ島に逃れている。

その後には彼の島ではミノア文明が生まれた。このことを考慮するにイタルの想像はさらにクノッソス宮殿に描かれていた通称『バリジェンヌ』の姿とも重ならざるを得ない。その時代及び風土への空想が同時に駆られる。それは単純でいながら様々な滋味を孕み、諸感覚に満ち満ちた地

中海性の官能である。素朴で含蓄に富んだ美しく、開放的なフォルム、蒼穹と紺碧の海と様々な
愉楽、繁栄、開放的な服装に金の装身具をつけた若い男女の恋情、イタルの空想は走る。疾駆す
る。

「パリジエンヌ」と楽夏とは似ても似つかない。イタルにはそのアイデアが彼女の肖像に投影され
る。なぜそう云うアイデアを投影するかはわからない。だが或る日、なにかが惹きつけ、それを強
要したのだ。理由はわからない。

或る人が愛され、或る人が顧みられないのは道徳や精神の高貴さによるものではない。人間は
けて平等ではない。本来ならば彼女のように愛されるべきであつたたくさんの女の子たちがい
たはずであつた。だが実際にはそうならない。そうでなければならない理由は人間の理解を遙か
に超えている。

この世のことは全てがそうではないか。

努力すら運命である。努力した者はなぜその意志の強弱が自分に湧いたかを分析し尽くせるだ
ろうか。同じ境遇にあつても屈する者と勝つ者がいるのは既に天性の差である。それは個人の努
力だろうか。

また絶対に超えようもない境遇の差もある。

たとえば物乞いとして憐れみを強く誘うために幼少時に四肢を切斷されてしまう子どもたちが
世界には実在する。その子らのうちにスポーツ選手としての天性を持つ者がいなかったと、だれ
に断言できるだろうか。

同じ人間なのに或る者は苦節の末に脚光を浴びて栄光をつかむが、或る者は罪も科もないのに
努力への機会さえも閉ざされる。だが富める者は災いである。勝利者は災いである。今笑う者は
災いである。

努力への共感偏った世界観だ。もつと多くの英雄や偉人がいたはずだつたことを無視してい
るからだ。

しかしそれが人の性である。すなわち自然は不条理なのである。イタルが楽夏に見出す魅力は
皮膚やしぐさが有する自然の暴虐性であつた。超えることのできない、現実の堰である。理性に
よつては理解できない、事実の非情性であつた。

これに牽かれるように惹かれ、憑かれることは、たとえば死に怯える皇帝イヴァンが人民を拷
問にかけて眺めることによつて死を超克しようとした試みの焦執性にも似ている。彼がそれを抱
くのは幼少の頃の或る事情による。

一人の女子がイタルの注視に気がつき、指差して楽夏に教えた。女の子たちが一斉に視線を彼

の方に向ける。楽夏も彼を見る。女の子たちは再び視線を戻して互いに向かい合い、笑い声を上げた。

楽夏だけが視線を戻す際に意味ありげな眼差しを残すようにしてアーモンドのかたちをした眼とすました鼻末とをゆつくりと横顔にする。そして二度と彼の方を向くことがなかった。

それ以外の女子たちはもう二度、彼に一瞥を投じて顔を顰め、また中心にいる楽夏の方へと向き直り、会話の続きを始める。

「いいね。」

まさにそれさ。所詮この世は暴力だけの世界だ。だからおまえはそれがいい。古代アッシリアの帝国のようにね。ふ」

イタルはエンジン・ストロークのような間断のない無機質なリフをダウン・ピッキングで刻む。どことなくフラメンコの拍子を連想させた。

「楽夏。」

おまえの『存在』はおまえの気持ちに関係なく、古代の女神のように素直で、残酷で、理不尽だ。俺の空想を無際限に膨らませる。素敵だ。俺はおまえを好きなんじゃない。おまえに触発された俺のイマジネーションに耽溺しているだけさ。

だから俺の愛は真実だ。非人間的な愛、最も純粹な聖愛、愛のアイデアだ。世俗的な愛ではない。そんな牡蠣の身のようなぐちゃぐちゃしたものは日陰の湿り気だ。俺のは純粹愛さ。地上でだれにも知られない。ましてや告白なんかしない。おまえに触れすらしないだろう。できるならば云うことすら拒む。現世に実る愛など糞だぜ」

叭羅蜜斗は金色に染めた髪を自分で刈って長短ばらばらに突き立て、寝癖のようにしている。

ジョニー・ロットンふうだとおもっている。だがその日の気分でポール・シムノンだとも言い、これぞオリジナル・パンクだぜと嘯いて安全ピンのピアスを挿すり、へらへら笑う。奇妙な名の所以は彼の生家にあつた。畝邨村にある古刹貞観正國寺の住職は畏れ多くも摩訶般若波羅蜜多心経から採った名を息子につけたのである。なぜ檀家の響きを買わなかったのかは人心の妙と云うものだろう。人は時にどうして怒るのかわからないようなことに憤り、怒るべきことに無関心である。

自称「自滅的」なパンク・バンド、死す・ROCKSを中学二年生のときに結成し、進学後は真神高等学校最強のネガティブ・パンク・バンドであった叛(アンチ)に最年少で参加、ベース

を弾いていたが、ほかのメンバーが卒業と同時に上京して活動を行うために強制的に脱退させられていた。パンクの匂いがあるだけで技術不足の叭羅蜜斗は卒業があることを理由にクビにされたのである。

そんなときに友人から声をかけられた。

バンド名はvvw (the quadruple of V: 四倍の、或いは四重のV)。Very Very Well - doneに由来する。vvwが転じてthe quadruple of Vとされるのは、wがvの二重で総計すれば四重のvと云うところからである。

かくして叭羅蜜斗はvvwのベースリストであったからこの日、第一音楽室でストロークを繰り返している同学年、ヴォーカリスト兼ギタリストのイタルを見るなり、なじるのであった。

「なんだよ、そのチューニング。」

もしかしてオープンDとか、Gとかって云う奴？ それにしても弦が緩み過ぎてやしないか。しかも六弦を外して、キース・リチャーズじゃあるまいし。

レイジーなリフのフィリングがワイルド、って言えなくもない。ブルージーとも言えるかもしれない。だがキャッチー過ぎるぜ。コマーシャルリズムじゃないか。迎合主義は俺たちのコンセプトじゃないはずだぜ。アヴァンギャルドだ」

「莫迦な奴だ。相変わらずおまえにや、なにもわかつちやいない。

ふ。大衆迎合主義だど？ クールだぜ。だいたい、まともな演奏もできなくせに、なにがアヴァンギャルドだ。前衛的って云うのは下手糞って意味じゃないようだぜ。わかっているか、腐れパンク野郎。

そもそも迎合主義を嘲ること自体が通俗的さ。そう云う退屈な、耳タコのウザい科臼には飽きしているんだ。わからないか。

いいか、アヴァンギャルドなんてものはな、ちつともアヴァンギャルドじゃねえ。前世紀以来すっかりスタンダードになっちゃった。そう云う皮肉すら陳腐な風刺となって久しい。俺が試みているのはアヴァンギャルドの強姦だ。だからポピュラーでキャッチーなのさ。コンセプトなんだ。ふ。つまりこの曲は音楽性じゃない、コンセプトチュアルだ」

「むちゃ言うぜ。聴いただけでそんなこと、だれにわかるかってんだ」

「そうさ」

つまりそれが大衆迎合的じゃないって云うことさ。わかってもらったことがどうして重要なんだ。おまえは自家撞着だ。おまえの考え方こそ大衆迎合主義さ」

「イタル、おまえは凄くクールだぜ。全々話にならない」

「それが普^ふ蕭^{しやう}の言っていたバンドのコンセプトだったはずだろう」

バンド結成を提案したのはイタルでも叭羅蜜斗でもない。もう一人の生徒、普蕭と云うイタルの同級生だった。普く蕭然たり、それが彼の名の意味だ。イタルはその字句を見ると蕭々たる雨を連想する。どの学年のときだったかは忘れているが、国語の教科書に見た詩句であった。日頃の主張と違い、イタルはその感傷的な詩が好きだった。

普蕭も室内に入ってきた。直線的に伸ばした髪を喉元の位置で切り揃えて縁なしの眼鏡をかけ、嘴のように人を刺す鼻。いつも眉根を寄せて凝視するような眼。神経質そうな痩せ過ぎの少年だ。

「さあ、議論は終わりだ。いいから、イタルの好きなようにやってみよう。現実的な共感を与えることが目的ならば確かにその主張には無理がある。常識的ではない。だがイタルの言うことはもつとものだ。だれにもわかってもらえないこと、なんの代償もないこと、僕らがいかにパンクスかと云うことだ。

それからもう一つ。

叭羅蜜斗、イタルのことを批判できる立場か。君のベース・ギターだってコードのルート音を半ミ्यूートしながらガリゴリ、ボトボトとピッキングしているだけじゃないか。皮肉な意味では確かにアヴァンギャルドだよ。なんのアンサンブルにもなっていない、不調和、破壊的で、非音楽だ。常識じゃ理解されない。

と言っても僕はそれを非難するのではない。要は結果的にイタルのコンセプトと同じじゃないか。そうさ。だから叭羅蜜斗、君かとにかく言うのは墓穴を掘るつてもんさ。

なあ、僕らにとつて音楽性は問題じゃない。君らに声をかけたのは音楽的なアプローチにうんざりしていたからだ。もうなんでも君たちの前で言っていることだとはおもったが。

関係ない者同士がぶつかることで予想を裏切る曲が生まれる。違和感、異質感、なによりも異物感、しかも金属的な、不協和な、乾いた感じ、そう云うのが快感になる」

この中でバンド経験が初めてなのはイタルだけだった。音楽への関心など一向見せなかった彼がフォークギター一本を手独りで唐突に路上ライブを始めたのは、ほんの数ヶ月前だ。

最初はロバート・ジョンソンを耳で聴いただけのだからめなコピーで、よく人前でやれたものだと感じるほどの酷さだった。だがそんなことを気にする彼だろうか。構わず吼えた。かつてアメリカ南部の農園にいた黒人たちの間で今に謂うブルースがホラーと呼ばれていた史実を彼は意識して忠実に吼えていた。

むろん田舎の畦道でやっても仕方がない。その後の彼の発言とは矛盾するが、当時の演奏活動

は地元ではなく、安房市内の神中州中央公園に向いて行われていた。もともと通っていた真神校が同市内にあったので普通に通学する日には単なる行き帰りの道でしかない。

よって当然のごとくに帰宅途中の生徒らの耳目に触れた。普肅はしばらくの間は無言で通り過ぎながら密かに聴くだけであつた。彼もまた叭羅蜜斗のごとく或るバンドを辞めたばかりだったのである。

そのバンド名はRZD^{リズド}。真神高の同じ二年生で、娑邸摩^{そうま}と云う少年がリーダーをするユニット、正確に言えばバンドのリーダーが彼であると言ふよりはバンドが彼の附属品であつた。メンバーは頻繁に替えられていた。RZDと云うのも実は娑邸摩のあだ名である。

強いナルシズムを持っていた娑邸摩は自らRZDを名乗り、また人にもそう呼ばせていた。五歳になったときからである。他校の学園祭や路上ライブで名を馳せ、ライブ・ハウスなどの活動もないうちから地元アマチュアの間で既に評判になっていた。そんな有望バンドから普肅は敢えてドロップ・アウトしていたのである。

遂に或る日、公園のでたらめなイタルのライブを聞き終えてから普肅が言つ。

「イタル、どうせなら君はバンドでやった方がいい。

僕がドラムを叩こう。叭羅蜜斗も誘つてあるんだ」

普肅はこれの中では唯一、学校の授業以外の音楽教育を受けた人間だつた。楽譜が読めた。三歳の頃からピアノやバイオリンを習わされていた。とは言え、それも小学四年生で終わっている。イングヴェイ・マルムステインの放つ光速のギターを聴いて以来、音楽への嗜好が一変、転向してしまつたのである。だから本来はギターを担当したい人間であつた。だがイタルも叭羅蜜斗も正確なドラム・プレイをなせず（と言ふか全くできず）、選択の余地なく彼がドラム・セットの椅子に坐っていた。

RZD時代に真黙な俊才プレイヤーで通つていた普肅がそうまでしてイタルや叭羅蜜斗と云つたバンド仲間の落ちこぼれに声をかけてv v wの活動を扱んだことをだれもが皆不思議におもつた。普肅は意に介さない。

「人の評価などいい加減なものさ。不純なものなんだ。だれもが人間的な動機に基づいて自分のために評価し、肯定しているに過ぎない。人は皆、自分について語っているのさ。全てが自己弁護、自己肯定だ。

よく聴けば人の話なんて全てが自慢話じゃないか。皆、本能に踊らされているに過ぎない」

初めて楽器屋の二階にあるスタジオを借りて音合わせをしたときは悲惨なものであつた。

まるで演奏自体に関係のない物体であるかのように即物的な削り音を刻む叭羅蜜斗のベース、

バンド内で一番演奏経験のないイタルが心許ない運指で弦すらもまともに押さえ切れないために音がぶれるギターを弾きながら、演奏のみならずヴォーカルまで担当するのだから論を待たない。キーの合わない歌声（歌うにつれて絞るようにキーが高くなる）が不規則に断続するばかりであった。

だが普肅は大いに満足したものである。

『最高だ。抒情性の余地はない。非常にウエルダンだ』

以来数ヶ月、少しも上達しない叭羅蜜斗に比べてイタルはだいぶましになった。やがて彼はブルースの特徴を大仰にデフォルメするようになり、貯金を叩いてレスポールの中古品にギターを替えた。その頃からレッド・ツェッペリンを聴くようになった。携帯の着信音を『Whole Lotta Love』にした。

さて第二音楽室に入った普肅はドラム・セットに坐ると、両足でバスドラムに三連符を食らわし、ハイハットを二発叩く。

『さあ、時間がない。今は議論のときじゃない。ハードボイルドで行こう。実践あるのみだ。』

練習を始めよう。違つか、叭羅蜜斗』

「ちつ。で、それがウエルダンだ、って言いたいんだろ？」

叭羅蜜斗がいつもどおり嫌そうな顰め面を偽装してぼやく。

街に『The Street Blues』と云うライブ・ハウスがある。ポスターが貼られ、剥がされ

いく重にも痕跡を残された壁に切られた入口から階段を下りた地下階にある。安房市内の神中州にある、風雨に晒された雑居ビルに過ぎないが、近隣市町村では唯一のライブ・ハウスであった。オーナーの八木周公ひつきみは山羊髭を生やして喉仏の飛び出た痩せ過ぎの五十代、長く垂れた眉毛の下から弛んだ瞼に半ば蓋われた眼で人をにらむ名物男だ。

演奏者を常に県内のアマチュア・バンドに限っているのも、商売度外視の彼らしいこだわりだった。基本的に未成年をステージに上がらせないが、午後五時から六時までの開店前一時間を開放し、高校生以上で二十歳未満のバンドに演奏の場を提供していた。演奏者の上達のためには観衆が必要であると云う考えから営業時間ではないその時間帯に一般客が入場することを許し、料金も取らず、ドリンクも販売しない。

ただし未成年者バンドならば無条件と云うわけではなかった。月に一度、その同じ時間帯を使って公開審査を行い、これに合格したバンドに限定している。審査する者はむろん八木独りであ

った。

合格は一回につき一バンドに限り与えられ、合格該当者が少ないことも多い。だが一度合格すればその後一年間は開店前一時間の出演権がえられた。既にいくつかのバンドが登録されているが、登録バンドは互いに日程を調整し合いながら登録の有効期間内に順次出演し、演奏の腕を磨くのである。

今月とともに初挑戦のv v wとR Z Dとが争う予定になっていた。

「わかっているぞ」

叭羅蜜斗がベースを膝に置き直しながら言った。

「俺はR Z Dなんかに負けたくねえ。イタル、おまえがドラムを叩けねえから普薫がやっているんだぜ。もう少しクールな奴を決めてくれよ」

「おまえのクールがわからないね。」

オリジナル・パンクやっていたくせに、アグレッシブで、かつアヴァンギャルドに、挙句の果てにはクールにか。意味がわからない。

第一、おまえだってドラムができるのか」

普薫がスネアを打つ。

「さあ、もう一回だ。『B L U e Z』のステージは僕らで獲る。それだけを考えるんだ」

イタルがギターのストラップを肩にかけて立ち上がる。

「ふ。よっぽどR Z Dが嫌いになったらしい」

「あんな奴だぜ。当然さ」

そう言って唾を吐く叭羅蜜斗。

「汚ねえからよせて、いつも言ってるだろう」

イタルは眉を蹙めた。

彼はR Z Dと同じ幼稚園に通っていた。その頃から既にR Z Dは自らをR Z Dと称し、R Z Dと云う人物になり切っていた。憂鬱を気取った態度や時に凶暴さを覗かせる気紛れ、睥睨するかのような驕慢の眼差し、既に当時からのものであった。世界を見ながら自分の内面世界だけしか見ていない、そう云うタイプの典型だった。

それなのに、或いはそれゆえに女子に持て囃される。楽夏が彼女だ。生物学的に強性な本能がR Z Dを扱はせたのである。恋愛の魅力に道徳などなんの関係もない。イタルはそう云う動物性を閲覧することを自ら楽しんでいたし、楽夏とR Z Dとの抱擁シーンを今日までいく度も思い描いては虐殺を眺めるように堪能することがあった。今もまたその矯激な焦燥の天邪鬼に駆られ

始めている。止められない。

狂ったように演奏が再開された。騒音が空間を充たす。典型的なガレージ・ロックの排気臭が空気を焦がした。熱汗で指が滑る。イタルも唾を吐いた。マイクに噛みつくような叭羅蜜斗のハモリは少しも合っていない。普簫のドラム演奏だけが慈悲のない時計のように正確だ。イタルは猫背でスタンド・マイクに絡みつき、絞るように声を出し、喉が哽れる。

午後四時に練習を終えた。ドラム・セットは一々撤収すると大変なので置いたままにしているが、イタルや叭羅蜜斗は磨いてケースにしまう。その間にメンテナンスをするのが普簫の常だ。いつも手入れがいい加減な叭羅蜜斗が既に終わらせて言った。

「まだ明るいぜ。どうするか？」

屈んでペダルを調整していた普簫が髪を邪魔そうに払いながら顔を上げた。

「そうだな、駅前のM cにでも寄って打ち合わせするか、演る曲目も完全には決まっていないし、できるだけありえない曲目を、って考えているんだが、どうおもつかい？ そのときの気分でもいいが、それにしても或る程度、土台があつた方が壊しやすい。

時間はあるかな」

イタルはケースのチャックを引っぱり上げた。

「わるいが、俺はちよつと行きたいところがある。

なあ、叭羅蜜斗、明日、俺たちの教室に来てくれ。ミーティングは昼休みにしようぜ」

叭羅蜜斗は嘲りの笑みを泛べる。

「かまわねえさ。おまえが学校に来るんならな」

イタルはじゃあなと言つて外に出て向かった。

RZDのところへ向かった。市内のアパートを借りている。彼の実家はイタルと同じ真神村にあつたが、通学のためと云う名分で親に仕送りさせていた。村から市内までは独り暮らしを強いられるような距離ではない。イタル同様、RZDも裕福な、田舎では所謂『由緒ある』家柄であつた。

「久しぶりのような気がする」

行き慣れた路を歩みながらそうおもつ。だがなぜだろうか。そう考え始める。

『楽夏に会つてしまふからだ。まずそれが理由の第一であろう。それだけではない。たぶん意識的にも無意識的にもRZDから分離しようとしているからか。それに考え方も互いに異なり始めているし』

バタフライ・ナイフのようにポケットから出し、電話を入れた。

「安心しなよ。俺なら今は独りだ」

RZDは万事承知のふうで言う。アパートは繁華街である神中州から数百m歩いた麹坊町にあった。錆びた外つけ階段を上がる。一階が部屋だ。鍵はかかっていない。入ると狭いキッチン、鍋とケトルとの先には六畳一間があるばかりだった。

斜陽に翳る中、RZDは彫像のようにしゃがんでいる。物憂い表情だ。ウェーブのかかったまっ黒い髪を無造作に分けて垂らし、どこことなくラテン系の顔立ちだった。イタルが前に坐ると緋と黒とが対峙するかたちになる。

部屋には音楽雑誌も（弦の錆び切った、全く使われていないギターが一本立てかけられてはいるが）まともな楽器もタブ譜もない。バンド活動をおもわせるものはノート型パソコンと手書きのノートだけであった。広げられたままのノートには詩が書き殴られていた。

バンドで演奏する曲も詩もRZDが独りで作るが、楽譜に記すことはできない。また楽器も弾けない。彼の作る楽曲は音楽と言うよりはRZDと言う表現者の自己実現の一環である舞台装飾でしかなかった。

部屋の北西側の壁には祭壇がある。

古い仏壇に西欧アンティークの小さな燭台を飾り、小さくて緻密なキリスト磔刑の十字架像を立て、紫の絹で装束された金十六折の摩訶般若波羅蜜多心経を六曲一隻の屏風のように後ろに配していた。

最上段には深い青の額を持つフォトスタンドが置かれ、写真ではなく、かな文字ふう非常に細い『非』^イと云う文字を入れている。細かく切った金箔を繋ぐように貼り、かたちを倣したものであった。そのフォトスタンドは以前にはなかったものだ。かつては雨に濡れるストーンヘンジの写真（蛇の目）を小さなパネルにしたものが置かれていた。

この野郎はまたいったい、なにに到達したと言っのか、そんな疑問からイタルが訊ねるとRZDは答えた。

「蛇だ」

「蛇？」

蛇ニヘ蛻ニヘじゃなくてか」

Vacant な駄洒落だ。最高にクールだ。そう驕慢する。RZDは無視するかのよう（蛇の目）に虚空を凝視したまま言葉（蛇の目）を返す。

「原蛇だ。わかるか」

「ふ。わかってたまるか」

イタルは真逆に見えるように気取って緋髪を振る。ギターを手にした。RZDが欣然たる微笑みを泛べる。

「神ではない俺の神さ。全宗教に対して邪教であり、あらゆることに異教なる神、非なる神だ。一向性がないと云うことさ。アイデンティティが維持されていない。だからすべてが公算し、あらゆる現象がその意図の下に生まれたとも言える。

意向に叛いて存在するものがない。非ゆえの完全性だ。反逆者はありえない。神に非ざる神に背教者や異教徒がよりえるか？

この神は、非神は人間が持つような諸概念じゃ捉えられないんだぜ。人間の持つ一切の考えは常になにかであること、特定性を要するからな。直観でわかるだろうが、限界を区切らなければ一個の考えにはならない」

「へえ、そうか。そう云うそれだつて特定^{なにか}じゃないのか。おまえの言わんとする意味も一つの『考え』って奴じゃないのか」

イタルは弦を親指と人差し指とで弾きながらそう言った。奏でられたのは金属のがりがりした音だ。全く調律されておらず、物質の音でしかない。

「はん、当然。そのとおりだ。

だからどうだつてんだ。変わりやしない。

俺たちは概念なしでは語れないが、そうでありながらも諸概念の最初を支えた原的直観がなんであつたかを説明できない。『動機』として先天的に植えつけられていたか、或いは純粹な根拠があつたか。

議論自体が虚しい。わかつたつもりで喋っているが、現在だつて俺たちは意味不明な言語を捲くし立てているに過ぎないんだぜ。

ただ納得があるだけだ。そうじゃねえか？　だがこの納得つて云うのはどんな状態のことなんだ？　わからねえ。納得があるだけで、なにもありやしねえ。そのこと自体、納得しちまつているだけじゃねえか。

俺たちや理解などしていかない。ただ『納得』と云う心理状態があるだけだ。知ってはいるが、なにもわかつちやいない。説明を試みても、それはただ言葉を置き換えるだけだ。同義反復だ。トートロジー擦り合わせて馴染んだだけだ。すべては只管直観されているものでしかない。直截そう観ぜられているまでのことに過ぎない。それ以上、どんなことも言えない。

それが非神だ。なに者でもありえない。どんな定義も妥当しない。なにか定義を下そうとすればするりと乖離しちまつんだ。

だから非神は自らの尾を咬む蛇なのさ。メビウスの輪だ。想像してみろよ。原蛇は喰らっているのか、喰らわれているのか、喰らい尽くせるのか、喰らわれ尽くされてしまえるのか。解決がない。永劫に自己同一性がえられない。

自己超克の無限遁走曲だ」

「ふ。またかよ。わけがわからないぜ。

おまえの独りよがりな妄想だ」

「はん、どうだ。これは偉大なる発見、大いなる真理だぜ」

「ふ」

「イタル、忘れたか。俺たちやあ、幼稚園生ぐらいの頃からこんなことを大発見と称して繁々議論していたんだぜ。なぜだとおもっ

「ふ。回想かよ。うざいぜ。

って言うか憶えてない」

「いいか、俺にはわかる。憧憬さ。俺たちはな、満足できなかったんだ。

幼いなりに空転していた。なにかに駆られていた。焦燥だ。だれだっそうだ。存在は全て滾っている。彗星のように燃え散りながら疾駆している。全ての存在者は超越的なものを、Superなもの、崇高なる聖性を欣求している。身を裂くまでも狂おしく欣求している。

これが宇宙を衝き動かし、これによって全宇宙が生成し、これがゆえに存在して、これがために逝かんとして動く。巨怪な大運動の一員として人間も脱目的な超越を志向しているに過ぎない。一切の現象がこうして顕在し、世界はかくも存在している。

俺にはビッグバンによる宇宙の膨張は自己超越の二形式に見えるんだ。少なくとも生物の進化はまさにそれじゃないか。鳥類がただの跳躍であることを超えた最初の瞬間（きつとそれは極小な飛翔だったに違いない）の超越感覚はどれほど自己肯定に満ちていただろうか。殆ど宗教的、天啓をえたかのような、崇高で恍惚の瞬間、聖性を自己に直観した瞬間であつたと俺は信じて疑わない。

『自由、平等、友愛、しからずば死』

現今冷静に見れば思想として是非論もあるが、この言葉の真義はそう言う場所にはない。瞬間に叫んだフランス革命がどれほど高揚感に満ちていたか想像してみる。王侯貴族の圧迫から解かれ、宗教の抑圧から遁れ、いきなり見たこともない地平に立つたんだ。新しい空気を吸ったんだ。夜明け前の空のようだったんだ」

イタルは『Jumpin' Jack Flash』のリフを鳴らしてみた。酷いもんだが、妙にストーンズのハ

イド・パークでのライブをおもい起こさせた。

「はん。世界はそうやって展開してきたんだぜ、イタル。それらの総和として全世界は一向の脱自運動を繰り返している。

そいつはただそれだけが目的で、それ以上、それ以前の理由がない。俺たちには見出せないから、俺たちが見出すこと、それ以外の審査基準がありえるか？ 俺たちは闇に生まれ、闇に帰るのさ。そう言う暴力的な基準しか原的には与えられていないんだ。

聴いているか、イタル、世界はエクスタシーを志向する巨大な衝動だ。おまえはその言葉の意味を知っているか。脱目だ。自分自身から脱け出ることなんだぜ」

弾くのを止め、指についた錆を眺める。

「ふ。じゃあ、死ぬってことだな」

「はん。そうだ。

死ぬんだ。世俗の全ての価値に異叛するんだ。世間で善いときれる一切の価値基準に異叛する末路を遂げるんだ。

つまりは生首の逆さ吊りだ。ありうべからざるんだ。なあ、イタル。

おまえは死をおもつか」

「いや」

「現実には死ぬときに俺はなにをおもつか。時々それを考える」

「ふ。感傷かよ。

死ねばわかるだろうさ」

「そうだ。実際、死ぬときにはオタオタするのさ。オタオタするのは仕方がない。仕方がねえからと言ってそれで収まっちゃうわけでもない。収まるもんか。どこにどう転ぼうが、受け入れられないことには変わりがない。

しかしイタルよ、そいつは迫っている。感しないか。おまえも急かされているはずだぜ。矯激さに駆られているはずだ。

だから時折普通の自分が震えながら振り返るんだろ？ なにもかもがなくなろうとする刹那俺はなにをおもつかと。だが俺たちの自然は非情で暴虐的だ。情弱を憐れまない。常に点火の状態で。おまえも自分を牽き裂くことを欲している。おまえも自爆したいと欲情している。おまえの欲望の一切が炸裂だ。それがαであり、ωだ。

「どものときからずっとそうだったじゃないか。おまえもおまえ自身に異叛でありたいと切望している。おまえ自身への叛逆と云う自家撞着性の欲望にとり憑かれている。だからおまえも原

蛇の精髓だ」

「ふ。冗談じゃねえ。おまえと俺とじゃあ、コンセプトが違い過ぎる」

「ふふん。なんとも言うさ。」

一切の言辭は嘘だ。偽りだ。反吐だ。俺が時に形而上的なアイデアの世界を渴望するのはその純粹な空気が儼や菌類のような湿った世俗的価値観を、真実だの愛だの家族だの成功だの名譽だの損得だの正義だの不当な仕打ちだのと云う、価値基準に支えられた世俗的世界を殺戮する者だからだ。

わかっているはずだぜ、イタル。全ての価値はまやかしかだ。騙されているんだよ。この世で偉大なものは意味のない自己犠牲、犬死、非業横死、砂、路傍の石だ。どれも世俗の価値に異叛する」

「くだらねえな。」

ナルシシズムの塊。欺瞞だぜ。

「阿呆らし過ぎる」

RZDが薄ら笑いを浮かべた。

「最高の賛辞だ」

「だろ？」

「偽装者はおまえだ。」

全てはステージで明日になる」

イタルは立ち上がった。

「で？ それだけか。」

ふ。

聞くまでもなかったな」

「イタル。」

おまえはイーリヤのことを忘れたか」

イタルの心臓が鋭く刺された。なにがあつたわけでもない。あの頃はまた七歳だった。

「なにを急に言いやがる」

「忘れたか、と訊いているだけだぜ」

「残念ながら忘れちゃいない。それがどうした」

「あれが俺たちのターニング・ポイントだった。俺たちは存在の意味を究明したんだ」

「け、小学一年生でか」

「年齢は関係ない。樹木や蟬たつて哲学している。蛙やヤモリや蟋蟀もだ。犬や猫も瞑想するんだぜ。」

思考の拡張子が異なるから俺たちの脳髄では再生できないだけだ。だからと言ってそいつが存在しないことにはならない。多くの人間が余りにも無知で暴君的なだけだ」

イタルは再びRZDの部屋にあるフォトスタンドを眺めた。青。青はイーリヤを連想させる。懐かしくもまた今でも切実に迫真する断片的な記憶。

「イーリヤこそが神聖の極致だった。俺たちはまた異性のことをあからさまに語ることを恥じていたから互いになにも言わなかったが、晰かにおまえは俺の、俺はおまえの胸にその炎が点されたことを感じていた。あのときから俺たちは点火されているんだ。」

イーリヤは俺たちの宗教の聖者だった」

イタルの記憶にあの恐ろしい映像が鮮やかに甦り、魂を震撼させた。

幼い彼が毎年夏を過ごしていた別荘は真神湾の海辺の高台にあった。穏やかで明朗な真神の湾はわずかな砂浜を透き通った波が優しく撫でるほかは、白い崖が海に迫り、南フランス沿岸部のどこぞかに似ていた。

イタルは湾に浮かぶ安房島を下く眺めたものである。島と言っても松の生えた大きな岩でしかなかったが、その容姿は偉容であつて、昇る朝に燦めく細波に独り立つ姿や夕日を浴びて沈む夕色の美しさなど、いくら見つめ続けても飽くことのないものだった。

その別荘の隣に新しくできた、教会のような白く尖った屋根の別荘に、或る日、彼女は家族とともにやって来たのである。双眸が青かった。美しい青であつた。青とはなんと云う美しい色であつたか。

海を想わせる。

ラズル

バル

たとえば海島島のインディゴオ浜から眺める海の下、*azul*だ。そこにはサンチャゴ爺さんのBarがたたずんでいる。海に浮かぶバルなどと言えば詩的だが、浜に転がる流木を粗く組んで造った貧疎な小屋が棧橋の尖にあるだけだ。その棧橋も椰子の枝を粗綱で結わいただけの頼りない代物で、白浜から上下左右に曲がったり傾いたりしながら拙く波間へ伸び、言われなれば棧橋とは知られないだろう。

バルは風に繁く流された。だが爺さんはテキーラを呟りながら二日間もあれば（全く同じと云うわけには行かないが）元どおりに組み上げる。その程度のものだった。

屋根は椰子の葉を葺いただけのもの、木洩れ目が零れ、潮風が通った。床材は大まかに成形されただけで、加工するまでもなく、樹皮は波に削り取られてしまっている。素足にひんやりしたそれでいて或る種の乾いた温みとも言える木膚独特の軽らかさを与えた。それを楽しみながら見る海、その蒼、藍、紺、碧、青の、燦々たる氾濫。

平和に満ちあふれ、穏やかでありながらも激情に駆られたかのように天空へと響鳴し、成層圏の彼方まで駆け上がる光の瀾であり、イーリヤの眸だ。その中央には凄まじい、明晰と云う深淵があり、真実と云う言葉の字義とおりの意義を充たし、赫奕、炯らかな、睿らかに、蒼穹の帝旗のように誇らかに光輝して翻る、すなわちそれは。

彼女の瞳孔の、生存を絶滅にまで至らせるその純粹さの、驚嘆すべき透明度である。それを喩えるならば、もしあるとすればだが、百数十m下の細石の凹凸さとも異様な解析度を以てあたかも分厚いクリスタル・ガラスを通して見るかのように強く縁取り、鮮やかに、晰らかとする透明さの湖水だ。

最も濃く高貴なる蒼を湛えるそれは奥に蒼よりもさらに本質なる蒼である蒼藍を倣し、その奥には真髓である紺紺が燦のようにあり、燦火の奥に燦の燦たる紺碧の炎があり、真央が青碧であり、蒼碧であり、藍碧であり、紺碧ですらあった。

さらにこの眸をより大きく見せる、三十六枚の薔薇の花弁のような睫がある。白晳の皮膚に桃くように明瞭に立ち上がる、強い黄金色の睫毛だ。黒い睫毛よりも濃く両眼を縁取る放射状の装飾であり、それがイーリヤの虹彩の至聖の紋章のような放射状の文様と調和し、より効果的である。かくも荘厳される双眸は見る者に距離を縮めて迫るかのような印象を与えた。凜々として燦めくその瞭らかさは西欧の大聖堂の薔薇窓を想起させる。

そのように彼がイメージする起源は五歳にも満たない幼少時に見た古い装丁本の独逸語版『ウンディーネ』にあった。

それは古い小説だ。別荘に特にしつらえた父の書齋にあった蔵書だった。読めなかったが、歳月を経た皮革の装丁や挿絵が気に入っていた。

書齋にあるものでイタルの気に入らないものなどない。獅子や翼ある牡牛や龍首を持つ怪獣の彫りがある大きな楓材の机にクリスタルの文鎮、革張りのソファにキューバ産の葉巻が入った象嵌細工の小函、金銀嵌細工が入ったモンブランに皮革製パッド、薄ピンクの入った金細工のペンスタンドとクリスタル&色大理石のインク瓶とのセット、アラベスク文様の鮮やかなクム産のシルク絨緞。これらに囲まれた書齋は当時の彼にとっては尊ぶような檜材の書棚が並び、蒼古な雰囲気包まれた独特な静謐の聖域であった。書籍を読むと言うよりか、頁をめくって眺める聖

務を楽しんでいた。

書籍は聖職者イタルを守護する、歴史に刻まれた戦士たちだ。

トウキユディデスの『ペロポネッス人とアテナイ人との戦史』伊訳版やサッルスティウスの『カティリーナ内乱記』パリ写本復刻版、オロシウスの『異教徒に反論する歴史』、作者不詳の『アングロサクソン年代記』、ヴァッラ『コンスタンティヌス大帝進状論』、ヘルダー『人類史哲学の構想』、ミシュレー『フランス革命史』、ブルクハルト『世界史の考察』等々。彼は背表紙を観覧するだけで恍惚とした。埃の燦めく古代の図書館で天窓からの一条の光を浴びながら黙々と書見する修学僧の陶醉を味わった。

『ウンディーネ』は水の妖精の悲劇物語だ。人間に恋をし、魂をえる（妖精はそのままでは魂のない、自然のように気まぐれで無慈悲な存在らしい）が、やがてその最愛の夫を殺さなくてはならなくなる。そう云った内容だ。後に翻訳本で知った。美しくも哀しい妖精ウンディーネがイーリヤのイメージと重なったと言うよりか、それを求めている重ねたのだと言える。金髪碧眼であったと云う以外に両者に共通点はなかった。もともと今後は思い込みで染められ、記憶は捏造され、定かではないが。

イーリヤは外国人夫婦の一人娘であった。父親はインド系、母親がギリシア系アメリカ人だ（とおもっている）。母譲りの膚は白皙ふたえであったが、眼の大きさがインド風にエキゾチックだった。それを眼周のマロン色の量と大仰な二重のラインと邪教的なかたちを描く晰らかな眉とが装飾し、リビアのアテナの燦眸さんめうそのものであった。

彼はイーリヤと彼女の家族とが越して来た目をはつきり憶えている。その日は賑やかだった。遊びに来ていたRZDとともにイタルは騒ぎを見ようと外へ出た。二人ははじめて間近に見る外国人たち（田舎ではテレビ以外では見ることがなかった）が意味のわからない言語を発しながら歩いているのを見て、吃驚したものだ。

「&ばいぜ」

RZDがそう言った。

「異だ。これは陰謀だ」

イタルはもつともらしく怪訝な顔をしてみせる。

「どう云うことか？」

「わからないか、これは侵略行爲だ」

「侵略？」

「奴らは日本にじわじわと浸透してこの国をいつか侵略するんだ」

「でたらめだよ」

「おまえはそのままぼんやりしていればいい。拉致されても知らないぜ。世界は危険に満ちている」

「拉致って？」

「説明している暇はない。」

行動するんだ。智慧を使うんだ。時間には限りがある。生きるってことはハードなんだ」

RZDは身をかめるようにして玄関に戻った。イタルも慌てて家内に引っ込んだ。二人はカーテンを微かに引いて様子を覗く。

そして観察した。父親に手を引かれて眼を輝かせながら別荘に入るイーリヤの黄金の髪は眩いばかりであつた。意気揚揚としてその大きな双眸を睜き、父に向かつてなにかを夢中で語っている。イタルの胸に襲ったものは千代の大聖堂であつた。巨大なドームの頂点にある窓から燦々たる日光が零れる神聖な昏い空間。蒼穹の彼方から猛烈な勢いで飛んで来た光の弾に撃たれた。哄笑する強大なインドラ神の天を裂く雷霆が身を貫くのを感じたのだ。

人間が永劫に知ることのできない、聖なる無窮の典籍に綴られた聖なる言葉。イタルはなにかが自分の中で変化したことを嘶かに知った。ずっと前からそれが来ることを知っていたのに忘れていたのだ。本来の自分を忘れていたのだ。大地を、空を、無限の宇宙を包み込む霧のような黄昏の光芒の中から浮び上がる妖精ウンディーネの像かもはや避けられない宿命のように微笑みかける。ウンディーネの意味を悟った。それはこの少女なのだ。と。イタルはRZDの身体にも同じような現象が起きていることを皮膚から伝わる電氣的な衝撃で感知する。二人はもう口を利かなかつた。その後どんなふうにRZDが帰って行ったのかを覚えていない。

「俺は考えた」

翌日、再びやって来たRZDが開口一番そう言った。

「もし奴らの目的が侵略だったとしても、奴らはジミ・ヘンドリックスのことを知っているかもしれない」

「ジミ・ヘンドリックス？」

「俺のお袋がレコードを持っている」

「レコード？」

「昔のCDだ。彼は一九六〇年代のミュージシャンだ」

「僕の母さんが生まれた頃だ」

「俺のお袋たってそうさ。お袋は古い音楽が好きだったって言っていた。昔のミュージシャンは

凄かったんだ」

「じゃあ、カストロみたいな人だ」

イタルの父はキューバのフィデル・アレハンドロ・カストロ・ルスを尊敬していた。或る晩、彼に父は語ってくれたのである。

「昔だ。おまえにとつても父さんにとつても同じくらい昔のことだ。生まれる前のことだったかな。

キューバ革命と云うものがあつたんだ。

キューバと云う島国があつてね。そこにフィデル・アレハンドロ・カストロ・ルスと云う人がいた。キューバはバチスタと云う人が支配していた。カストロはキューバの人たちをバチスタから解放しようとした」

『正義のヒーローだったんだね』

『そうだ。』

彼はキューバを出て外国で力を蓄えていた。そして遂に計画を実行することにしたんだ。まず海を渡らなければならなかった。

カストロはキューバに上陸するのに十人乗りのボートに八十二人を乗せた。もの凄いむちゃだろっ？ 動くこともできない。一基あるエンジンは交互に故障し、船足は進まず、嵐も来た。最悪だ。航程は三日も遅れた。そんなことも知らずキューバでカストロの仲間が戦いの準備して待っていた。カストロが島に到着したら一斉に蜂起する予定だったんだ。だから予定の日、予定の時刻になると、サンチアゴ・デ・クープで武器を持ってカストロの仲間たちは戦いを始めた。だが彼らは全滅した。海を渡って来るはずのカストロたち革命戦士が予定の日に着けなかったからだ。

しかも遅れたカストロたちは予定の場所にも上陸できなかった。予定していなかった場所に殆ど難破同然で上陸した。たちまちバチスタの政府軍に発見され、襲撃され、なんとか逃れたが、数日後には島の農民の裏切りに遭い、バチスタ政府軍の奇襲を受けた。彼らは山中で二、三人のグループに分かれ、万が一の場合の集結地点であるモンゴ・ペレスに向かった。

カストロは七日間、飲むことも食べることもできなかったんだ。二週間後にモンゴ・ペレスに到着し、その二日後に遅れて着いた弟のラウルを含む四人と合流した。

彼らは再び会えたことを喜び、そしてカストロは言ったんだ。

『ライフルが七挺。我々は戦いに勝ったぞ』

凄いだろう。さすがのゲバラもそれを聞いて呆れたらしい」

「デバラって？」

その頃のイタルにはなにが凄いのかわからなかった。

「カストロの友達さ。」

だれもが状況は絶望的だと考えていた。どう考えてもわずか数人で二国家を、アメリカを後楯に持った軍市政権を倒せるなんて、現実的なことは考えられなかっただろうからね。

だが現実にはカストロの勝利で終わった。人間の気力と勇気が一つの世界を、運命を、現実を変えたんだ。革命だよ。現実にはかたちなんかない。行動が革命を起こす。行動は革命なんだ。行動すれば現実が変わる。昨日と今日とが違ふ日だと云うことだ。それが行動と云うことさ。

イタル、不思議におもわないかい。昨日と今日とは違ふ日なんだよ。なぜそれをあたりまえだとおもえるんだろう。不思議じゃないか。行動は不思議だ。それは世界が不思議と云うことだ。マジックだ。世界は人間の行動の集まりだからだ。

いや、おまえにはまだ難しい話だったな。いずれはわかるときもくる。ともかくカストロは若手三十三歳で偉業を成し遂げた。現代の英雄だ。地上で現実となった、人の夢だ」

「けれどもどうやって戦いに勝ったの？ なにをしたら、夢が叶うの？ どうしたら、奇蹟が起こせるの？」

「それこそほんとうに難しい話だなあ。」

イタル、今日はもう遅い。続きは明日、話そう」

だが話はそれ切りで以後なかった。それだからよく覚えていて。終わらなかった話は忘れられたとしても、いつまでも胸に生き続けるのだ。

イタルはRZDに再び訊ねた。

「僕、わかったよ。ミュージシャンと云う人はマジシャンなんだ。ジミ・ヘンドリックスも現実を変えられる人なんだ。」

で、奴らがジミ・ヘンドリックスを知っていたらどうするの？」

「もしそうなら奴らがたとえ侵略者であってもそれは日本の問題であって、俺には神聖だ。話が聴きたい。」

それでこの身がどうにかなくなってしまつても俺は構わない。聖なることに命を捧げるんだ。命を賭けるんだ。そうでなければ卑怯だ」

「やめなよ、危険だよ」

「構うもんか。」

どうせ俺は大人になったらアーティストになって、ドラッグをやって死んでやるんだ。それが

夢さ。卑怯者になりたくない」

「むちゃくちゃだよ」

「死ぬのが怖いのか。俺は臆病者じゃない。俺は貫くんた。おまえは平和に生きればいい」

そのときイーリヤが庭に出て来た。RZDは外へ出た。イタルは物陰に身を潜め、眺めた。RZDが話しかける。イタルは隠れ、見つめ続けた。見つめながらRZDは言葉が通じないのではだろうかと思いついた。

RZDが声をかける。イーリヤは驚いたようであった。別荘の敷地を仕切る柵を挟んで二人は話す。最初は光あふれる眼を丸くしていた少女はやがて笑い声を立てた。そして身を乗り出し、なにかを頻りに語りかけ始める。RZDはだんだん俯き出した。やがて彼は唐突に背を向け、戻って来る。

「話がわかったの」

RZDはそれには応えなかった。イタルは待った。

「彼女は」

漸く言葉を発した。

「彼女はなにも知らない」

「それがわかったの?」

「ああ」

イタルは羨望の眼差しで見つめたが、RZDは茫としている。

「どうしたんだよ」

「なんでもない。そうか。」

これがほんとうになんでもないということなんだ。おまえの親戚さんの言うことがわかった。これが現実だ。

まさにこれがなんでもない、ただの」

「なに、それ」

「だから昨日と今日とは違う日なんだ。そう云うんだよ」

「だからそれが」

「なんでもない。気にするな。なにも起こっていない」

「そう見えないよ」

「じゃあ、『全てが起こった』、でいいか?」

「どう云うんだよ?」

「うまく言えないな。たぶんこれが解脱だ」

「ゲダツ？」

「この世で一番神聖なことだ。究極だ。つまり彼女はなにもわかっていない。彼女はジミ・ヘンドリックスを知らない。」

彼女は聖者だ。彼女がジミ・ヘンドリックスだと云うことだ」

「わからないよ」

「つまりそう云うことだよ、マジックさ」

そう言つて彼は皮肉な微笑を泛べた。

しかしそれ以来、RZDは友人であるイタルの別荘には全く寄らず、直接イーリヤのところへ通うようになった。烈しい喪失感を覚える。その胸の疼きは嫉妬だった。彼は友を奪われ、同時にイーリヤを奪われたのである。

だがそんなイタルも一度だけ彼女と言葉を交わしたことがあった。偶然、彼が独り庭の土を蹴つていたときのことだ。突然に声がした。

「ねえ、なにをしているの？」

愕いて顔を上げると、白い木柵に両肘と顎とを載せてこちらを見ているイーリヤがいた。面白がるようなその碧眼に捉えられ、隠しごとを見つけられたかのように烈しく動揺する。ともかくも言葉を発しなければならぬ。そうおもい、焦った。

「君は、君は日本語がしゃべれるんだ」

「あたりまえじゃない。私は日本で生まれたのよ」

「だって君は」

「ねえ、私、イーリヤ。あなたは」

「僕はイタルだ」

「イタル、イタルね」

彼女は記憶するように繰り返した。

「あなたはRZDのお友だちでしょう？ 私も彼の友だちなのよ。」

ねえ、で、なにをしていたわけ？ それをさっきから訊いているのよ」

彼はなにをしていたのかおもい出せなかった。だがイーリヤの視線をたどって自分の足下に眼を落とし、困惑する。

「あ。これか。だから。」

だからモグラさ。モグラを探していたんだ」

嘘だった。意味もなく土を蹴っていただけだ。

「へー、モグラがいるの！ すーい、どー？ 見つかった？」

イタルは益々赤面して俯く。どうにも応えられなかった。

「ねえ、イタル、どうなのよ、あなた、さつきからはつきりしないわ。ねえ、どうしたの？」

涙が込み上げた。唐突に、虐待されたかのような、自らを憐憫する感情に支配された。そう云う状況を望んでいたからそうなったのかもしれない。

「ねえ、どうしたの？」

イタル、もしかして泣いているの？」

涙がさらにあふれた。恥ずかしくてなにも言えなかった。

「私がなにかわるいことを言ったの、イタル？ ねえ、そうだったのなら謝るわ。ねえ、イタル、はつきりしないわって言ったから泣いているの？ ねえ、ごめんなさい」

彼は応える義務を感じて努力し、どうにか返事をした。

「違っよ、泣いてなんかいないよ、ただ」

そう言つて勢いよく手の甲で眼を擦り、無理やり顔を上げた。輝くイーリヤの眸。言葉が止まってしまった。燦然たる蒼碧が放射する聖なる紋章、形而上的な純粹性、真実である純粹、本質である真実、最も鮮やか、最も強く晰らかでそれ以外のものを薄く色褪せた影のようにしてまうリアリテイ、唯一この世で現実として存在するなにか、イーリヤ個人にもこの場の状況にもいかなるものにも関係していなかった。ただイタルの深奥に原初からあり、生まれた瞬間に忘れられていた本来の自分と云う感覚、その感情がより強くなって再び熾り、強烈に頭頂から土踏まずまでを貫く。射抜かれた。光燦にすべてが無みされ、裂けながら飛び、砕け散つては全空間に拡がった。

イタルはRZDになにが起ったかを理解した。彼女のフォルムは解脱の精髓を象徴する聖紋であり、それを見たものは自らの全生涯を觀るのである。このときに生は尽きる。イーリヤは聖なる者であった。

そして人はまさにこのために生まれ、これだけが現実であり、後の人生はそれを追つたためにある附録であり、エピソードに過ぎないと晰らかに覺るのだ。それが魂に刻印され、今も消えてはいない。彼は肯定的な絶望により疾駆する炎となる。

以後の記憶はなかった。そこまでしか憶えていなかった。イタルは時折、記憶を反芻する。非現実的だった時代を、場面を懐かしむのであった。そして彼は思い出すのである。あのとき以降、異様な幻想に囚われ、気づくとそれに捉えられていることを。

イーリヤの架刑の場面である。彼女が磔にされ、火に炙られ、悶絶死する姿である。

幼少のイタルは生々しく人間が剥き出しにされるその空想を畏怖しながら執拗に独りいく度もおもい泛べ、胸の裂けるような陶酔を味わった。してはならないと思えば余計に駆られ、執拗に繰り返された。その恐るべき脳裏の映写は絶対に受け入れがたい動画であり、生身のまま彼を牽き裂くかのようであった。

公開審査はくし引きから始まる。演奏の順番を決めるのだ。観る者の度肝を抜こうと計るバンドにとつては後でプレイするよりか先に演じる方が客席に強いインパクトを与えられると云う点で原則的な優位性を持つことができる。

「畜生！」

叭羅蜜斗が歯を噛み締めて悔しがった。くしで負けたのである。普肅はむしろ傲然と顎を上げ、意に介さない様子。その眼は冷たくさへあった。指先でスティックを回す。

「関係ない。僕らが最高だ。聴く奴らを凍りつかせてやるだけさ。そうじゃないか、イタル」

イタルはそっぽを向いて無関心、無表情だった。呟くだけだ。

「ぶ。」

めちやくちやをやつてやるぜ」

観客はまだ数人。だがRZDのステージは凄絶だった。

ライトが落ち、ドラムスの大楽がスティックでカウントするするや否や、デイスティションをかけた春慶のギターが音の洪水を起こす。大楽がバスドラムの上に三つ並べたタムタムを右から左へ連打しながら素早く移動、それを合図に春慶が大仰なストロークを交えながら速いリフをかき鳴らし、その疾風で見る者を薙くような金属的な衝撃波を起こした。数秒で突然それが止み、RZDがポケットから紙を出して自作の詩を読み上げる。気の触れた古典劇俳優を気取っていたそれも数秒、言葉の途中でRZDは葉が切れて禁断症状を起こした患者のように叫ぶ。

最初の曲は彼らのオリジナル『憂鬱なるF氏の優雅なシガレット・ケース』でネガティブ・パンク。題名と音曲とが全然合っていない。歌詞は放送禁止用語の連続で、すべて絶叫で押し通す。聴衆を圧倒し、一曲目が終わった。

「へえ、凄えもんだな。どうせまたフリってるんだろっぜ」

叭羅蜜斗が軽くそう言ってみせれば、普肅も冷笑する。

「と言っか、相変わらずのナルシストぶりだな。安っぽいね。狂気や異常を気取っているのさ。」

大昔にありふれていたスタイルに過ぎない」

女の子が一人ステージに上がり、キーボードの前に坐った。それは（楽夏ではなく）黒髪長い、見たことのない子であった。

鍵盤から幻想的なフレーズが霧のようにわき上がる。東欧の深い森に彷徨うような心地にさせられる。春慶が十二弦ギターを出し、エフェクターのスイッチを踏んで切り替える。大衆がクラッシュ・シンバルを撫でるように叩く。ベースの翔太は最低音部でメロディのようなラインを奏でた。RZDの歌はまるで朗読だった。やがて呪文性を帯びてくる。複雑に組まれたルーン文字の田陣が彼の背後に泛ぶかのようにであった。静かに終わる。

審査時に演奏できるのは三曲までだ。春慶が六弦と五弦とを親指のつけ根でミュートしながら上下に刻む。そこにベースが二本の弦で做す和音を重たく絡ませる。目覚めたようなドラムスが加わると同時にRZDのヴォーカルが入った。

沙漠の非情 風の乾き 軍馬の群れ その鬣

炎が燃えて 黒く煙 陥落する城 トロイヤ

アキレウスが 膝を大地に 突いて 屈する

女が叫び 赤子が 叩きつけられ 虐殺の刹那

なにもかも架空 無から無に帰る それだけ

愛も哀しみも 現実には呑み込まれるだけ

膝を屈するアキレウスの 微笑み アルカイックな微笑み

RZDが顔を歪めて喚きながら烈しく髪を振る。マイク・スタンドを振り上げて叩きつける。それを待っていたかのようにギター・ソロが噴出した。リリカルな激情を孕んだ、なにか運命のような悲愴さを雄々しく湛えたフレーズだった。絶叫調の歌詞は聴き取れないが、イタルの脳髄は明らかに『イーリアス』を泛び上がらせた。彼の脳内麻薬はヘレネをたやすくイーリヤに替えた。燃え上がり陥落する城砦は焼かれる磔刑のイーリヤだった。イタルの眼が現実には輝く炎を捉えた。それは彼よりも前列にいて躍り上がる楽夏の髪だった。ステージのライトを反射して跳ね上がる度に燦めく髪の振り乱れ、それが炎であった。絶望的な気持ちに襲われ、抜けるような爽快感に魂を解放させられる。ディオニュソス神狂乱舞の秘儀祭だ。その存在が持つ暴虐性は滑らかな金属の平面の上に殴り書きされた墨痕、平滑なステンレス製の板から宙石が突き出しているかのような唐突性、現実空間を紙のように千切り、異空間への路を開く神聖な指であった。

手に取れそつだ。駆られる。込み上げた。

強烈な異叛性に捉えられたイタルは矯激な焦燥を帯びた自裂の欲情に衝かれ、火が点いたかのように人をかき分け、前へと突き進んだ。荒々しく人をどかせた。楽夏の右肩をつかみ、力任せに振り向かせる。左手で抑え、右手で髪を引く張つて唇を奪った。一瞬彼女は眼を丸くした。なにが起つたか理解できないようであつた。彼は頬を張り手打ちされた。再び楽夏を引き寄せ、自嘲的とも取れる調子で彼女の耳元に囁いた。

「ふ。」

そんなに好かつたか？」

「畜生、ざけんな」

彼女にもう一度、引つ叩かれた。周囲のいく人かがさすがに気がつく。イタルは傲然と周りを見据え返す。そして満足げに微笑む。

楽夏はリビアのアテナ・パルテノスではない。『パリジエヌ』でもない。わかり切つていた。本質も美も正義も存在しない。わかり切つていた。この世にあるのは現実でしかない。絶望でしかない。

その刹那に襲う、解放されたことによる昂揚感、『自由、平等、友愛、しからずば死』、自らを突き裂いて上を目指し、自らの足で自らの頭蓋骨を踏み砕く超越の、過剰なる自在感覚、自らを焼き尽くし、彗星のように自らを迸らせて撒き散らす。難破船のような自由に鼻腔も膨らみ、叫びたいような気分だつた。

脳内麻薬があふれた。曇みかけるように襲うライトの点滅の激しさ。RZDが発する、絶望のような絶叫。シンバルの暴虐性は空気を破り、弦をかきむしるピックの苛烈な引つかき音が斬切する。

十分以上続いた演奏は飽かせることなくエンディングとなり、終了後も余韻でしばしの静寂。その後の喚声。再び訪れた静寂とともにv v wの出番と相成つた。彼は彼女を突き放し、普簫と叭羅蜜斗とが既に待っているステージの傍に向かった。叭羅蜜斗が後年こう語つた。

「つまりそのときはじめてイタルが楽夏に言葉をかけたときだつたんだ。歴史的瞬間さ。それから奴はこんなふう言つたのさ。

『見ていろよ、楽夏』」

観客は少し増えていた。奇抜な髪型や服装をした連中ばかりだ。彼らもバンドを演っているの

である。アーティストの方が純粹な観衆より多い。互いによく見知っている人間であつた。ああいつも出て来たんだ、みたいな顔でイタルたちを見ている。

「ふ。チープだぜ」

吐き捨てるイタル。沈黙。間のわるい沈黙だつた。構うふうもなく、彼は意味不明な呟きを繰り返し、十数秒。

太音響が再び空間を庄した。愕いたことに第一曲目は『憂鬱なるF氏の優雅なシガレット・ケース』、RZDが最初に演奏したオリジナルである。もしこれがv v wに卓越した技術があつてRZDを超えていたならばそれはそれでアイロニカルな意味があつたであつたが、晰らかに技術的にそんなレベルにはない。ぶざまな、愚行としか言えない行為。だれもが唾然とした。なにをしようとしているのか理解できなかったのである。

イタルは驕慢な異教の神を気取つて大仰に緋髪を振り乱し、顔を曇め、舌を出して震わせ、唾を飛ばす。

演奏終了後、しらせ切つた空気があるばかりだつた。ブーイング以前の状態であつた。彼は衆目を侮蔑するようにステージから睥睨する。それがなおさら滑稽で、ぶざまであつた。叭羅蜜斗は山羊の角と耳とを持った淫猥なサテュロスのようにへらへら笑うだけ。普蕭は大いに満悦して叫ぶ。

「最高だ！」

すぐさまスティックでカウントを取る。一曲目だ。叭羅蜜斗が重たいベースの単音をティラノザウルスの足音のように刻む。イタルが緩やかで軽快なブルースのフレーズを爪弾く。が、唐突にテンポの違う粗いカッティングのリフを繰り返し始めた。ベースの音とは全然合っていない。ドラムが半拍ずれておもむろに立ち上がり、イタルが声を絞り上げるように歌う。

ロバート・ジョンソンの『Preaching Blues』だ。だが会場にいる人間はだれもその曲を知らない。演奏が終わり、再び息苦しい沈黙。普蕭がノーブルな鼻を突き立て堪能するかのように眼を細め、眉根を寄せる。まるで満足したメフィストだ。益々喜悦を隠せない。叭羅蜜斗は相変わらずへらへら、イタルがぼんやりなにかを考え込む様子で立ち尽くしている。

「ラスト！」

その氣勢を上げた普蕭がスティックでカウントを取ろうとした瞬間、イタルは唐突にリフを刻み始める。軽快な、歯切れのよいカッティングで刻まれるリズム。

叭羅蜜斗が愕く。知らない曲だつたからだ。普蕭の方を振り向いた。一瞬、呆氣にとられていた普蕭だったが、すぐさまドラミングを開始する。慌てて叭羅蜜斗も追いつこうとする。CとF

とのコード進行、シンプルな繰り返しだったのでどうにかベースも間に合った。たどたどしくまとまりのない楽奏の中、イタルのリフだけが泛いたように明快だった。緋髪を跳ね上げらせ、汗を撒いて歌を吼ふ。

君が好きでたまらない　たまらないほど好きなのさ

だけど君は奴のもの　奴こそ君の彼氏だから

俺の心は伝わらない　伝えることなどできやしない

だから歌うぜロックンロール　ロックンロールしかできやしない　Hey

ロックンロールはラヴレター　ロックンロールはラヴレター

ロックンロール・ラヴレター　Aha! Aha! Ahahahah!

凄まじくダサい歌詞、軽佻な、他愛もない安物ポップス、聴いている者らの人種を考えれば最悪のチョイスであった。叭羅蜜斗はやや赤面し、普肅は笑い出しそうになったが、それも凍りつく。イタルは身を裂くようにめちやくちやなソロを弾き始めたかとおもつとききなりギターを振りかざし、ベース・アンプに叩きつけた。烈しい不協和音と電氣的なノイズ、ギターのネックが折れる。弦だけで繋がっている。彼はその折れたネックをアンプに突き刺した。さらに耳を劈くような電氣的ノイズに、ハウリングのような鼓膜の痛くなる音が響き渡る。イタルは放心したように客席を見渡した。時間が止まったような顔、顔、顔。その中に楽夏の眼差しを見たような気がした。眼を凝らしたが、暗くてもうなにもわからない。残響の耳に残る静寂があるだけだった。だれも口を利く者はいなかった。全てがフリーズしていた。息を吹き返したように八木が怒号しながらステージに上がって来る。さすがの普肅も困惑の表情を泛べた。叭羅蜜斗も頬を引き攣らせ、笑わなかった。イタルは喚く。

「Are you feeling good?」

その夜のライブはすべて中止、バンド連中が息巻いた。八木が弁償とまでは言わなかったものの激怒し、普段の超然とした態度もどこへやら、血相を変えて叱責した。

「ごったい、ぶっつぶつぶりだ!」

普肅が謝罪する。

「すみませんでした。迷惑をかけたとおもっています。でもあれが僕らのやり方なんです。必ず

弁償します」

叭羅蜜斗も仕方なく、合わせるかのようにわけもわからずに無言で低頭している。イタルは無表情に不思議なものを見るような眼で八木を見つめ返した。スツールに脚を組んで坐りながらカウスターにもたれて頼杖を突くRZDが笑っている。が、眼は焦燥していた。

「二度と顔を見せるな」

八木が最後にそう言い放って背を向けた瞬間、イタルは聞こえるように嘯いた。

「ふ。」

『BLUeZ』は卒業したぜ」

八木は一瞬振り返り、もの凄い形相でにらんだが、それだけだった。再びつかつかと歩き離れる。

かくしてv v wは晴れて出入禁止の身となり、叭羅蜜斗も不貞腐れ、普羅でさえも意気消沈した。

ライブ・ハウスを出るとRZDらが薄暗く汚れた歩道に屯してしゃがんでいた。楽夏もいた。頬を膨らませてイタルをにらんでいる。RZDは今夜の審査に合格し、大方の予想どおり出演権を獲得していた。

RZD独りが立ち上がり、近づく。

「最高に安っぽいパフォーマンスだったぜ。おまえらしい、セルロイドやブリキの玩具だ。モンキー・ビジネスだったぜ」

「そっだ。つまり勝ったのは俺たちさ。」

貴様は太った豚だ、自家撞着だ」

「ふふん。だからどうした。最高だろう？ おまえなんか理解できないぐらい、成層圏の彼方までぶっ飛んでいるってことさ。」

俺はな」

互いに面白がるように相手を眺めて薄笑いを泛べる。

「また会おうぜ、イタル」

「ふ」

RZDが背を向ける。楽夏も一瞥を投ずることすらなく向きを変える。他のメンバーもそれに従った。

「あばよ、『BLUeZ』」

RZDは瞭かにそう言った。

その意味を考える間もなく、入れ替わるかのごとく十数人の若者たちが現われ、突っ立っていたイタルたちを囲んだ。

「こっちへ来いよ」

路地裏に牽き擦られた。袋叩きに遭う。

グランジ系バンドのレイプとロカビリー・バンドのへいりいとが特に執拗だった。へいりいのギタリスト、敦史は倒れているイタルの頭を蹴って最後に捨て科白を吐く。

「頭に乗んじゃねえ」

襲撃者たちが去ると無言でイタルは立ち上がり、なにこともなかったかのように服の埃を払った。

「畜生、もうおまえとはやつてられないぜ、イタルよ」

叭羅蜜斗は鼻血を噴きながら喚いた。

イタルは少しも抵抗していなかった。叭羅蜜斗は持ち前の腕っ節で相手のうち一人を叩きのめしていた。普簫は割りと被害が少なかった。元RZDの名ギタリストに多少の敬意が払われたのだろう。一番悲惨で、殴られるにままたに任せてぼろぼろにされて鼻の曲がったイタルは蔑むかのようにその鼻を鳴らす。

「ど」

イタルはそれ以来、姿をくらました。逃げた、隠れた、ほとぼり冷ましたと言われたが、事情はだれも知らなかった。

叭羅蜜斗はいつものように廊下で普簫に話しかける。

「よお。来ていないよな」

「ああ。来ていない」

おもいに沈んだ表情だ。

叭羅蜜斗が続けて言う。

「なあ、聞いているだろう。RZDの奴 『BLUE』 への出演を拒否しているらしい。春慶も大楽も翔太も頭に来ているって話だぜ。意味がわからない。どこもかしこもゴタゴタって感じだな。いったい、どうなっちまっているんだ」

「Ah? 今さらなにを言う。奴らはまともじゃないのさ。奴らだけの世界があるんだ。だから僕は組んだんじゃないのか」

そんなふうに過ぎて行く日々、今日も目覚め、トーストをくわえ、パジャマを脱ぎ、制服を着て家を飛び出し、駅の改札口を抜けて電車に乗り、プラットホームに下り、改札口から学校に向

かつて雪崩のようにあふれ出す学生らの群れの一部となる。その朝に限っていつもと違っていたことは突然に真神高から轟音が裂響し始めたことだ。

「おいおい、なんだ、こりゃあ」

叭羅蜜斗が校舎を見やると、屋上に人がいた。

「RZだよっ！」

誰かが叫んだ。

スタンド・マイクを振り回すRZDが屋上の欄干を乗り越えて縁に立ち、絶叫して歌っている。太音響でひび割れ、辛うじてザ・ビートルズの『Get Back』だと聴き分けられた。

「うひゃあ、屋上ライブかよ。畜生、俺もやりたかった。」

イタルがいりゃあ、こう云うのは最高に乗るんだよな」

舌打ちする叭羅蜜斗の後から普肅が言う。

「敢えてライブ活動を拒否してこれか。僕らに宣戦布告しているつもりだろう。どうせすぐ止められるさ。ほら、朝練の谷崎（サッカー部顧問）も血相を変えて校舎に走って行くじゃないか」

「けどよお、なんか悔しいぜ。こう云うのは俺らの十八番のはずだぜ。」

ったくよお、いつの間にセッティングしやがったんだろうか。昨日の放課後か、それとも今朝早くにか」

「やり方なんか問題じゃない。その気があればどうにでもなることさ。とは言え、これほどの大音響だ。街を揺るがしている。地震のような超弩級のサウンドだ。機材もそれなりのものであることは確かだ。結構、周到に用意したんだろうな。」

大成功と云うわけか。さぞかし苦情が殺到しているだろうよ」

「むちゃしやがる。ちえっ。指をくわえて見ているしかない、ってか。まあ、待つしかねえか、イタルを。」

まさしくゲット・バックだ」

「なるほど。」

そう云う意味もあるか」

だがイタルが戻るにはもう少し時間がかかった。そして再び彼が姿を現わしたときははだれもが驚愕した。皆ほかあんと眺めるばかりだ。顔の半分が鯢鱗のように逆立つ青い龍の刺青に覆われていたからである。

額の左半分が蛇行する青い龍神の尾に占められ、瞼を跨ぐ先には左頬に躍る四肢、くねる胴体玉をつかむ龍爪、龍首は唇の左傍らを長く伸び、顎の左に続いて雷霆のごとく縦裂けた双眸の瞳

孔、峻なる牙、炎爛たる舌が喉仏の脇にあった。

刺青には相応の時間がかかるものである。イタルの精緻な刺青は線彫りだけでも一ヶ月を要した。昔ならばいざ知らず、昨今の電動式では面積の割に期間の長い方であつう。彩色にはさらに一ヶ月。青龍の鱗はまるで彼の皮膚が鱗状になったかのようにリアルであつた。施彫の間、イタルは市街のタトゥー専門店に通う以外は殆ど外出せず、学校へ登校しなかつたのもそう云うわけからであつた。

県条例では未成年の刺青は禁じられていた。だが余りに凄すぎてボディペイントだろうくらいに考えられ、後日、刺青を晒して街歩きをするようになってからも、だれにも本当の刺青だとはおもわれなかつたものである。

完成の日まで彼は常に包帯をし、両親の問いにも応えず、奇行に慣れ、半ば諦めていた父母は深く追及もしなかつた。

級友らも親も或る日突然、顔面の左半分を青龍の刺青に覆われたイタルを見たのである。

生徒らの騒ぎをかき分けて現われた担任はなにが起つているかわからぬまま漸く人垣の輪の中心に出たものの、いきなり眼前にそのありさまを見て眼を剥いた。

「おまえ、なんだそれは。いったい、なにを」

二の句が告げぬも、威信を失うまいとしつつ、驚愕で紅潮した顔のまま、彼を教科（英語）室に連れ去つた。かくしてイタルは英語主任と担任とに挟まれ、生徒指導（体育・剣道）も現われる。

「それを落とせ」

イタルは無表情に黙っていた。

「なぜ黙っている。なんとか言え」

そつぽを向く。

「よし。生徒指導室に來い」

彼は追隨した。生徒指導は濡らしたタオルを渡そうとする。

「とにかくそれを落とせ」

イタルは嘲りを泛べた。

「なにがおかしいんだ」

彼は俯いてぼそつと言う。

「どうやったらタオルで落ちるのかな、つておもつてね」

「なにっ？」

「そんな拷問があつたような気がする。なるほど辛痛は世界の王だ。胸を破る心の痛み、肉を炙る苦しみの前ではだれもが崩壊する。

教師つてのは真実の奥義を教授することが仕事らしいね」

「なに。貴様」

「タオル地で擦って皮膚を剥くのかって訊いているんだよ」

「どう云うことだ」

「だから冗談じゃねえ、って言っているのさ。いいか、こいつはタトウだぜ。皮膚移植の費用でも出そうって言うなら考える余地もあるがね。

タオルでなんか無理だよ」

散々説教され、親が呼ばれたが、イタルは知らん顔で通した。その間は教室の方も騒がしかった。一度話題が終わってもすぐにその話に戻る。昼休みまでには学校全体に伝播した。

「奴ならいつかはやるとおもっていたよ」

叭羅蜜斗はにやりと笑い、得意げに言った。

「それが奴さ。やらずにはいられないんだ。他人が嫌悪の気持ちを抱くとなればなおさらだ。奴はとっちゃあ、そう云う行為をブリテイって言うんだ」

生徒指導から漸く解放され、親に引き渡された彼は烈しく訴える母を無理やりに先に帰し、普蕭と叭羅蜜斗と呼び出した。校舎に附帯する非常階段の踊り場だ。熱く強い風が吹いていた。

「活動を再開するぜ」

イタルがそう言つと、叭羅蜜斗が喚く。

「あたりまえだつ。」

おまえが勝手に消えちまったから止まっていただけなんだぜ」

普蕭は考え深げに頷いた。

「そうさ。」

むろん僕らは負けたわけでも、道を閉ざされ、行き場を喪ったわけでもない。だめになったわけでもなく、なにかに縛られているわけでもない。活動再開は当然だ。しかし凄いいことをしたもんだな、イタル。クレイジーだよ。

新境地を開いた君が復活して第一にやりたいことはなんだ」

「もつ人の前で歌うのは飽きた。人前で歌うことは理解や共感を求めることだ。俺の音楽をだれにも聴かせたくない。打算で歌いたくない。社会性なんか糞喰らえだ。一体化への衝動を抹殺してやる。全ては生存の衝動だ。俺たちの真の敵はそれさ。真の戦いがそこにある。RZDなんだぜ

目じゃねえ。ふ。

せいぜい悪鬼羅刹にでも捧けてやるか」

叭羅蜜斗が声を上げた。

「よし、決まったぜ」

普薫が怪訝な顔をする。

「つて、なにが決まったんだ？」

叭羅蜜斗はけろりと言う。

「なにも」

ともかくそう云うことだ」

三日後、地方紙の社会面に小さな記事が載った。

『 県立高校生が深夜の古刹で乱行 県指定文化財あわや

昨日深夜、真神郡畝^{ほむら}邨村の古刹に大音響が轟き、静かな農村の住民を驚かせた。この騒音による通報を受けた駐在署員の応援要請により現地に^{なぎくさ}雑草交番からパトカーが出動、周辺は一時大騒ぎとなった。

騒ぎの原因は同村の貞観正國寺にある能舞台で県立真神高校二年生の生徒二名が深夜十一時過ぎからロック・バンドによる演奏を行ったことによるもの。少年ら二名は『新能』と称し、かがり火も焚いていた。

警察に制止された少年らは早朝、保護者とともに補導センター職員に引き渡され、今後指導を受けるとのこと。補導の際、少年らは警察に抵抗し、一名は『これは悪魔への共感を晰らかにするための儀式だ』と意味不明な言葉を囁き続けた。なお、機材を運ぶために少年一人が農協の軽トラックを運転。無免許であった。

同寺の能舞台は全国でも珍しく、元禄年間に建造され、県の指定文化財となったもの。あわや出火の事故となる恐れもあったことから所轄の消防署も保護者と真神高とに対して厳重注意を行い、県教委もこれを重大視している。

同学校長のコメントによれば……』

しからば当然、村に轟き渡った最初の曲はザ・ローリング・ストーンズの『悪魔への共感』^{Simplicity for the Devil}だった。警察や消防からたつぷり叱られ、学校は停学処分となり、バンド活動の完全な禁止を申し渡された。

「これでRZDに二太刀見舞ったな」

普肅の声が携帯電話からそう言う。彼らが使っている携帯電話はHype-z2007で複数の機器で同時に通話できる機種だ。イタルは青銅器色でアンティーク調の浮き彫りがあるタイプを愛用していた。自室で寝そべりながら応える。

「ふ。別に。そもそも奴など相手にしていない。俺は張り合っつもりなどない」

叭羅蜜斗の声が割り込んでくる。

「だがそれにしてもよ、RZDの野郎も最近学校に来ていないぜ」

普肅の声も言う。

「らしい。」

ラリってばかりで話にならないと聞いている。春慶は違つバンドからの誘いを真剣に受け止めているようだし、大衆などは公然とRZD抜きでの新バンド構想を披露していたと云う話だ」

「そんな日が来るとおもっていたぜ。いよいよ破綻か」

「いや。」

まだだろう。奴はやるよ」

イタルの予言はあたった。

数日後、統一地方選挙の応援演説のために安房駅前に停めた街頭演説車の上にA首相が立った。時刻は予定どおり正午だ。まばらな拍手が上がった。食事に向かうサラリーマンらは振り向くだけで立ち止まらない。タクシーの運転手が窓を下ろして肘をかけ、帽子のひさしに手をやりながら眺めている。特別急行列車が通過した。路線バスのクラクション、高架の下を自動車走り抜ける響き、デパートの前の時計塔がチャイムを鳴らす。

日射しの乱反射するアスファルトからわずかに百数十m余り離れた場所、安房川を遡行していたポンポン船の薄暗い船底にいたRZDは半眼で時計を確認すると合図した。

「行くぜ」

春慶がチューニングを終えて引き攣った笑いを泛べる。

「へへ。ほんとうにやるんだな」

ドラムのセッティングを確かめながら不安定な椅子に坐ると大衆が言う。

「ビビってんじゃねえよ」

翔太がベースを手にしながら操舵手に声をかける。

「じゃあ、この辺で停めてください」

鉢巻姿で日に焼けたパンチ・パーマのあんちゃんが仏頂面のままで返事もせずに肩をすくめ、

エンジンを止めた。

「RZD、これではライブに復活する約束、忘れるなよ」

春慶が念を押す。

「ああ」

RZDはスタンド・マイクの位置を直しながら無表情で応える。春慶はそれを見て不安を感じた。

「約束だぜ。ここまでやるんだ。絶対だぞ、RZD」

「はん。喚くな。」

大したことじゃないぜ。どっちもな」

春慶がピックでギターの弦を高音部から低音部へと擦り上げ、機械的なブレイクの入る烈しいリフを弾く。甲板に組まれたドラム・セットで大楽が髪を振り乱す。ダイナマイトにでもなったつもりだ。ソフト帽を深く被った翔太がラフなチョッパーを決めてクールなポーズを取った。狂おしい性急さを持ったRZDの歌が迸る。

楽しいくらしさ パラダイス

ありがとよ A首相 愛しているぜ A首相

楽しいはずさ コロニー・ライフ

アメリカの作った アメリカが齎した コロニー・ライフ

もっと楽しくくらしそう植民地 原発なんてやめちまえ 素直に核で兵器を作るんだ

Hey! アメリカのオーダーのまま

Hey! オーナーの言うままに

Hey! Hey! アメリカン・スタンダードそのままに

そうしようぜ A首相 愛しているぜ A首相 愛しているんだぜ

サイレンを鳴らしたパトカーが護岸防壁の上で止まった。メガホンから声がする。

「止めなさい。ただちに中止しなさい」

橋の上からたくさんの人が見物していた。

春慶が不安そうな表情で弾きながらRZDを顧みる。その口は『どうするか』と言っているが、聞こえない。大楽は強がって無視する振りで打ち続ける。翔太は罵声やサイレンに呆然として両腕を下げた。RZDが超然と薄笑いを泛べる。傲然と胸を張ってピース・サインを挙げ、揺らし

た。『どうつてこないぜ』と云う顔で。

指で携帯の数字をプッシュした。

「ふ。電話に出られるとはおもってなかったぜ」

イタルが言々とRZDの傲慢な声が返ってきた。

「はん。おまえがどうした。心配して友情の電話か」

「らしいな。常に期待を裏切るのが趣味だ。」

しかしマジで薬がバレて拘束中だとおもっていたぜ」

「まあ、時間の問題だな。」

いずれお呼びがあるだろうさ。

異例なことに親が誓約書を書かされている。嚴重に監督いたしますってな。俺は今、実家にいることになっているぜ」

言って笑う。

「もともとおまえはマークされていたんだ。」

嫌疑が固まれば持つて行かれちまうぜ」

「はん。それがどうした」

「だろうな。」

しかしいずれは自由な身ではなくなる」

「ありえない」

「ふ。」

なぜだ」

「俺には神がついている。God Save!」

「ああ、そうだったな。忘れるところだったぜ。おまえには神が憑いている」

「偉大なる非神に栄光あれ、普き正義に勝利あれ」

「どうせなら米大使館の前でやりやよかった」

「ああ。」

そう云う類のジョークも考えたぜ。結構マジでな。

明後日、上海で首脳サミットが行われているのを知っているか。その後に大統領が日米首脳会談のために来日する」

「ふ」

「そこで俺たちの弾丸を爆破させる。成田国際空港までギターと小型マルチ・アンプとリズム・ボックスとをどうにか運べばやってやれなくもないか、なんてな。練つてもみたんだぜ、少しはだが当然のごとく経路が全くつかめない。

考えてみりゃあ、当然だ。大統領が一般のゲートを通るはずもない。

それ以前に余りに世俗的手法過ぎてやる気も半分だったが」

「いや、もつと以前の問題がある。

意味のないアジテーションに春慶や大楽や翔太が参加するわけがないぜ。そんなリスクを背負ってまでも無意味な行為をせずにいられないようなモチベーションを奴らが獲得することは生涯ない」

「確かに無意味だ。

意味があつたらやりたくない」

「で、もしやるとしたら一曲目はなんにするつもりだったんだ」

「ザ・クラッシュの曲だな、たぶん」

「『I'm So Bored With The U.S.A. (反米)』か」

「そうだ」

「普通だな」

「ああ、普通過ぎる。結局その程度のことにはかならないんだ。だからしたくなかった。とも言えるな」

「焦るなよ。俺はまだここにいて、今は」

「ぶさけるな。俺が先だ。おまえはいつも一番煎じり」

「いや。

俺はぶち抜けるぜ。おまえは世俗的だ。

たとえホワイトハウスで『Rape Me』を歌ったとしてもな、そんなアプローチは世俗的なんだ。

社会的な全てのアプローチが糞だ。多くの革命が失敗に終わっているのもそのせいさ。世俗は不純だ。だから燃え尽きない。

なによりもおまえの仲間が世俗的だ。おまえが強過ぎるからだ。実力のある奴らが集まっている。

俺はずっと負け続けている。永遠の敗北だ。サンチャゴみたいなものさ。世俗的じゃない、純

粹でプリティなのさ」

イタルは停学処分中に与えられていた課題の一切に手をつけず、日々を茫然と過ごしていた。多忙な事業家が久々のヴァカンスを取ったかのふうだ。Hype - z2007 をじっと眺め、玩ぶ。機械とはなんと美しいことか。まず魂がない。非情だ。つまり湿気がない。砂漠だ。無味乾燥。ドライである。素敵だ。無意味だ。無表情だ。

「もし俺が」

彼は独りごちた。

「たとえば阿羅漢となった大比丘衆や有学・無学、大比丘尼に文殊菩薩・觀世音菩薩・月光菩薩・弥勒菩薩ら陀羅尼をえた諸々の菩薩・摩訶薩らや眷族を従えた帝釈天・四大天王、自在天子・大自在天子、梵天王・光明大梵、難陀竜王・跋難陀竜王・娑伽羅竜王ら、また阿修羅王・迦楼羅王らなどに囲繞され、供養され、恭敬され、尊重され、讃歎され、究竟のマントラを説くとするならばただ一言、こう言っただろうな。

即説咒曰 『Hype - z2007』。

ふ。

まるでフェラーリ512ベルリネッタ・ボクサーか、ブライトリング・クロノマット・エヴォリユーションか、或いはイーリヤの双眸

イタルは新しい曲作りを始めた。なるべく下卑なくだらしない曲を、軽薄な歌詞を、心におもいつくままの言葉を綴り、削り、思案する。ギターを弾きながら基本的なリフを編み出すと、それを歌詞にあててみた。

RZDのことを考える。考えながら空気に向かって呟く。

「黒髪を振り乱して歌う悪魔か、ふ。奴は天才だ。それが敗因だ。奴は勝者の側にいる人間だからだ。努力する余地を与えられた人間だ。つまり敗北者だ」

どこでコードを変えるか、試行錯誤しながらキーを上下させる。

「奴は今、次の手を考え、堂々巡りし、満たされぬおもいに苛立っている。奴はすっかり罠に嵌っちまっている。この罠は逃れようとするほど絡まる」

結局、最初の基本アイディアとは全く違ひ、咆えるような獅子吼調のシカゴ・スタイルのブルースになった。

「言葉を弄すればするほど意図とは逆に嵌まって行く。もし奴がその智慧の輪を解くとするならば奴は天才を辞めるしかない。凡庸な無名に埋もれて消えて行くしかない。生存は畏だ。

なぜ解脱した仏陀は死のうとしたか。彼は為すべきことを為した。もう生きる要求が終わった

のだ。そして彼は教えを説くまいとした。

『もし私が教えを説けば』

仏陀はそう言った。

『この世の全ての価値を根底から覆してしまうだろう』

彼こそバンクスだ。右頬を打たれたならば左をも差し出せと言っのと同じくらい過激だ』
作った曲を録ってからeメールに添付して普簫に送る。本文『適宜にアレンジしておいてくれよ』。

アイコンをクリックし、キング・クリムゾンの『Larks' Tongues in Aspic, Pt. II』を聴く。非常にウエルダンだ。沙漠を連想させる。歌詞を変えたくなった。だがそんなに固執する必要があるのか。歌うときにまだそう云う気分であったならそう歌えばよいだけのことではないか。

電話から三日後、RZDからメールが来た。白鳥の歌だった。

『俺はあれから考えていた。

死。死だよ。

死とは何か。

ありうべからざることだ、受け入れられない、あつてはならない。非神だ。だから俺は神に殉ずる。

神が真実を俺に恩寵した。

イタル、なんで鉄が錆びるか知っているか。

鉱石から抽出された鉄は自然な状態じゃない。物質的に不安定な状態にある。だから酸素と結びついて安定した状態になろうとするんだ。

生命も同じだ。生は特異な状態だ。綱渡りのような奇跡的なバランスで成立している。だから安定した物質化、死へと向かう。

死が常態なのだ。

生は起爆剤を孕んだ状態だ。不安定で爆裂の寸前を行きつ戻りつしている。そうやっていよいよ緊張を増し、拡大して行くんだ。

宇宙の膨張とシンクロしているじゃないか。俺たちは轟音を立て広がる巨大な爆発だ。全てが一連の拡大運動なんだ。常態である死への反発と云う緊迫の上に成り立っている。だから人は死にたくないとおもつ、おもわされている。生自体に意味なんかない。

『墓隠』の言葉がなせ心地よいかわかるか。世間が言う全ての正論が所詮は欺瞞に過ぎないからだ。俺たちは死にたくないだけなんだ。死が常態だと言つてはいけない理由は宇宙の命題に叛

逆するからさ。『武士道は死ぬことと見つけたり』。意味や理論を拒絶してそう主張している。物事にあたってはただただ死ぬる方を択べと。

こう主張すれば百億の反駁が起こらう。生は尊く、意味があると。その上で積極的などか、肯定的な生き方とか、そう云う類の言葉をキーワードにした論説が起こる。飽き飽きだ。いったい、いつまで同じ美辞麗句を言い続ける気なんだ。そもそも諸概念が架空なのに。顧みろよ、少なくとも見積もっても数千年以上もなに一つ解決していないんだぜ。

要は死にたくないだけさ。不純だ。全ては欺瞞なんだ。

生存に操られているだけの操り人形だ。

俺は、『

それで終わっていた。イタルは考えた。RZDに電話をかけた。出なかった。もう一度、だめだった。eメールを送った。

『念仏みたいなこと言ってるじゃねえ。

純粹だと？ それはおまえの望みに異叛している。おまえの言うその欲求自体が生存に駆られてのことじゃねえのか。

そんなこと言っているうちはまたまただぜ。

って、どうやら俺はおまえを止めようとしているらしい。まだ人間らしい感情が残っているんだろうな。ともかく言っておく。

おまえが言うその生存とやらはそんなに簡単なもんじゃないようだぜ。なにを考え、なにをしようが俺たちはそれなんだ。それ以外になれねえ。それでしか構成されていない。俺たちは所詮細胞の塊だ。

作用の総和でしかない。作用の上に刹那に発火する現象に過ぎない。たとえばニューロンからニューロンへと伝わって行くインパルスのように。

おまえの勝手だが、望みの真髄に異叛するぜ。それでもいいのか。俺が言うのはそれだけだ』返事はない。その翌日も同じだった。

イタルは携帯電話で楽夏の番号をたどる。

「なんでよ、なんであんたがわたしの携帯電話を知っているわけ！」

彼は侮蔑の口調で応えた。

「以前にRZDの携帯を見た。

それがどうした？」

益々荒くなる彼女の声。

「それがどうした、だって？　だって覗いたんでしょー！」

「最低だって言いたいのか。ふ。」

「俺にはそれが贅辞だ。わかるか？」

「ぞげんな、わかるかよ」

イタルは言葉を無視し、

「RZDはどうしている？」

「は？　知らないわ」

「奴は電話に出ない」

「そう。」

「だったら勝手に行って見てくればいいじゃない。そうすればわかるよ」

「奴は焦燥しているんだ」

「どう云うこと。どうしてそんなことが言えるの」

「ふ。俺に勝てないからだろうな」

樂夏の息を呑む音が聞こえた。

「なに言っているの？　あんたたちライブで負けたじゃない。マジで莫迦じゃないの」

「莫迦？　ふ。知らなかったのか？」

「もう切るよ」

「たぶん奴はドラッグに溺れている」

「今まで以上に」

彼女の声が止まる。漸く拗ねた声で、

「わかっているんならどうにかしてよ。わたしは行けないわ。」

来るなって言うのよ」

「奴がそれを望んでいるならな」

「どう云うこと」

「ふ。」

「奴はRZDだぜ」

「意味わかんない」

「俺がプリティなのと同じさ」

「ああ、そう。」

「もっいいい。」

それがなんだって言うの。ほんつと、あんたとは話してられないよ」

「よく言われる。」

俺に行けって言うか。ライバルが俺よりも先行するのを邪魔しにか。ふ。みっともねえ。そもそもRZDなんざ目じゃねえし。それとも地上を超越しようとする奴に人間らしい感情を復活させようとするのか、よりによつてこの俺が。この俺がお涙頂戴ものを演じるのか。

ふ。最高だ。

行ってみるか」

「なに言ってるんだかわかんないけど、あんた、外に出られるの？ できないでしょう。やれるもんなら、やってみなよ。」

まあ、あんたなら、マジやっちゃうかもしれないけれどね。そう、好きにすればいいわ。なんなのよ」

「別に。」

異常なだけさ」

「知っているよ。」

気味のわるい刺青して。ほんつとの莫迦だよね、学校に来て欲しくないわ、気持ちわるいから」

「奴が俺に勝つ方法はいくつもない。それに勝つてもなんの荣誉もない。勝つことに意味なんかない」

「なんなのよ、唐突に」

「いや、もついい」

受話口の向こうの沈黙。

「ねえ」

「なんだ」

「あんたたち、どうする気なの」

「なにが」

「これからよ」

「俺はRZDのところへ行く。奴に会うだけだ。墮落する。それだけだ。ふ。素敵だぜ。」

Nevermore」

「なんなの、それって。そうじゃなくってバンド！ だよ。」

だってあんたたち、もつだめじゃん。でしよう？ もつ終わっているよ。もつなにもできない

じゃん」

「いや」

その直後、携帯電話の着メロが鳴った。少し待った。鳴り続けている。出た。普簫だった。
『どうしてすぐ出なかった？ どこかへ抜け出したかとおもったぞ。この電話は叭羅蜜斗とも繋がっているんだ』

三人はそれぞれの家で蟄居中であつたため、電話でしか話し合えなかった。その時点までではあるが。

へらへらと笑う叭羅蜜斗の声が聞こえる。

「いや、そろそろむずむずしてきてな。解散コンサートでもするか、って気分なんだ。でよ、どうする？」

少し怒り気味の普簫の声。

『どうするって？ それをこれから話すんだ。解散するとも決めていない』

『だがよ、八方ふさがりじゃないか、俺たち。これで終わりかなっておもっぜ、マジで。やるだけのことはやったじゃねえか。これ以上はもうないだろう』

「ふむ」

普簫も言葉に詰まったようだった。

「そうかな」

黙っていたイタルは口を開いた。

「まだだ。」

まだ満足できない。

終わりなんかない。終わることなんかできやしない。燃え尽きることなどないんだ。俺たち人間にとつて在ると言えるものはそれだけさ。なにがあるか、それ以外に？ 見ろ、世俗のすべてはそんな悪あがきばかりだ。全てが保身じゃないか。自己弁護だ。自己を肯定するための醜い虚偽に過ぎない。俺も同じさ。だから言っぜ。

『いかなる党派にも属さず、あらゆる党派を倒すであろっ』

サン・ジユストの最後の演説だ。その後、彼は死刑宣告にもギロチンのときにも不気味な沈黙を守り通した。

なにもかもが無意味だ。意味なんかない。逆ぎ吊りにされた生首みたいに狂笑してやるまでの
「ふふ」

叭羅蜜斗の自棄気味の声。

「ちえっ」

そらあ、威勢がいいがな。実際、どうすりやいいんだ。俺たちはおまえの望みどおり聴衆のいないパフォーマンスまで演じたんだぜ。

それ以上のステージがあるか」

「薪能はちよつとしたエピソードに過ぎない。或いはイントロか、プロローグでしかない。真の現実はこちらだ」

叭羅蜜斗の声が止まった。少しして普肅からの問い。

「どうする気だ」

イタルは胸壁に立って城壁を囲む数千の敵兵を睥睨する暴君のように告げる。

「どうにでもするぞ」

どんなふうにでも

どこでなにをするかなんて関係ない。そんなもの糞だ。いつどこでなにをしたら偉大だって言うんだ。偉大だからなんだって言うんだ。迎合主義だ。ごまかしだ。ふ。

また人間どもに見せてやるぜ。狂態を晒してやる」

叭羅蜜斗のぼやきが届く。

「そうなのちまうのかよ。ったく、しょうがねえな」

叭羅蜜斗が就寝の早い年寄りの静まる夜の八時、一階の窓から降りて叔父の家に向かった。母屋から離れて田んぼに隣接した位置に大きな納屋があり、農協のロゴが入った軽トラックがいつもキーを差しっ放しで停めてある。静かな田舎であつたが、エンジン音はだれにも気づかれなかった。普肅の屋敷へ向かう。

普肅の邸の前でイタルは歩哨のように立った。そこでもやはり納屋は母屋から離れて田んぼに接している。

普肅が納屋に封印されていたドラム・セットを持ち出す作業をしていた。叭羅蜜斗の到着と同時に三人で金具やボルトを使ってドラムやら椅子やらハイハットやらを荷台の上に手際よく固定する。アンプ類も載せた。紐で結んでシンバル類を鳴らぬように工夫する。

そのときである。農道に一台のバイクが停まった。叭羅蜜斗が舌打ちして振り向く。リーゼントを潰したくないのでヘルメットを被らない、へいりいの敦史だった。

「おまえらなにやってやるんだ」

普肅が応える。

「君には関係ないさ」

唾を吐く敦史。

「懲りずにまたやらかす気だな」

イタルはあけすけに言った。

「ああ、そうさ。安房駅前あたりがいいかな。

ぶちかますつもりさ」

叭羅蜜斗がその言葉に驚いて眉を上げながら、ちつ、バレちまったんらしいやうがない、と云う表情をしてから自棄で息巻く。

「おお、それともなにかい、また俺とやろうって言うのか」

「げつ、ふざけんな、貴様らなんか相手にしてられるかよ。へっ」

唾棄、そして悪態とともにバイクは去った。

「やばいかもな」

見送ってから肩をすくめて叭羅蜜斗がぼやく。普肅が薄笑いの冷めた顔で言った。

「問題じゃない」

イタルは叭羅蜜斗の肩を叩き、嘲り笑う。

「ふ。」

クールだぜって言えよ、叭羅蜜斗」

そう言いながら小型のポリタンクの入ったスポーツ・バッグをゴム製のロープで縛りつけた。出向くと安房駅のロータリーに一人の警官が巡回している。神中州駅も同じだった。警戒と言うほどのものではない。

「チクられたのかもしれないが、大したことはない。一応通報者に敬意を表している程度の警戒だ」

普肅は分析してそう結論した。イタルが決する。

「演奏時間は一秒でも長い方がいい。公園の方へ行ってみよう」

夜十時、トラックは神中州中央公園に進入し、恋人たちで賑わう大噴水の前に乗り上げた。園内はむろん車輛の進入禁止（それ以前に無免許だが）である。一台の発電機を動かす。

「エルネスト・チェ・ゲバラに捧げる！」

イタルの絶叫でゲリラ演奏が始まった。アベックらは驚愕する。

叭羅蜜斗の単調なベースが同じ音を刻む。イタルのギターが間断的に、落下するギロチンの刃のように挿し込まれる。普薫がスティックを取り上げ、スネアをマシガンのように打ち、タムタムに走る。暗雲のように膨らみ、なにかを孕み、なにかの始まりを告げるかのようにであった。ギター挿入の間隔が徐々に狭まり、緊張を迫り上げる。間断がなくなり、切迫した連符となつてうねりを作った。ヤマタノオロチが蛇身で大地を叩いて山を潰しながらのたくるかのような轟音となる。普薫がシンバルを激しく連打し、中近東の音楽を連想させた。それを各図に一瞬ブレイク、静寂。

途端に騒音の塊のようなイタルのギターが叩きつけられた。ミドル・テンポのドラミングが始まり、イタルはそこに規則的に音の塊を落下させる。シカゴ・スタイルのブルースだ。青龍の刺青が紅潮して蒼く燃え上がる。輪郭が眩い白隣に縁取られながら赫赤する。

血に塗られたかの緋髪が焰と化して躍り上がった。それを卓然と見上げているカップルもあれば、顔を顰めながら面に刺青の男などに拘わり合わぬが無難とばかり早々引き上げるものもある。懼れてか、ブーイングなど一切ない。髪を乱し、涎を垂らして白目を剥き、軽佻浮薄な歌詞を挑発的な嘲りの狂態で吼えるイタル。

沙漠の雲雫が吼えている おまえもいつも乾いている だが平気

俺は Squeezer おまえは Lemon だからおまえは Squit Honey Do It

俺は自由さ 気楽極楽軽躁浮楽 So What Blues 歌っぜ

俺は Vacant おまんが Violate Forever Virgin Do It Do It

演奏は長く続けられなかった。パトカーのサイレンが聞こえた。警官が降り、走り迫って来る姿が見える。叭羅蜜斗はベースを振り上げた。イタルが叫んだ。「『Real』だー」それは曲の名だった。Blues Harp の独奏で詞も伴奏もない曲。彼は狂おしく Harp をめちやくちやに吹く。そして荷台に飛び乗り、二リットル入りの小さなポリタンクをスポーツ・バッグから持ち出す。噴水にぶち撒く。ガソリンが入っていた。

「やめろ、イタルー！」

ドラムを中止して普薫が叫んだ。だがイタルは普薫から借りていたギターに残りの数滴を垂ら

し、火を点して噴水盤に放った。炎が凄まじく噴き上がる。

「ちえつ、やば過ぎる。完全に犯罪だぜ！」

叭羅蜜斗が青さめる。イタルは炎を眺めた。警察官に両腕を捉えられても薄笑いをしていた。

「美しいね、イーリヤ」

消防車のサイレンが鳴り響く。三人は警察署へと連行され、保護者が呼び出された。

父親がイタルを叩く。

「莫迦野郎、貴様と云う奴は！」

だが言い返した。

「ふ。それが革命家崇拝者のなれの果てか。

哀れだぜ。現実とは酷いものだな」

そして唾を吐いて憑かれた者のように父を罵り、挙句に嗤笑するのであった。

イタルたちは安房署の少年留置に（勾留に替わる観護措置として）十日間、独房留置され、取調べを受けた。取調室での聴取のほか、現場へ行ったり、検察庁へ出向いたりもした。移動中は手錠がかけられている。独房にいるときはなにもせずに過すしかない。十日が過ぎても留置のままであった。どうやら取調べが終わるまでは少年鑑別所に送られないようであった。

漸く検察官から家庭裁判所に事件の送致があったらしく、イタルたちは鑑別所へ送られる次第となる。鑑別所で四週間の鑑別期間を過ごした。所内では各独房に二人ずつの割り当てである。一番危惧されたイタルは自虐的なまでに優等生であった。また顔の刺青ゆえにトラブルを巻き起こしやすいとも懸念されていたが、少なくとも表面上は巧みに処世し、なんの騒動も起こさず、起こされもしなかった。同室の少年はあらかじめ刺青のことを言い含められていたし（それでも最初は両眼を丸くしていたが）、当時所内で最も優良な者（意図して配置したわけではなかったとのことであったが）でもあった。イタルは図書室での読書を特に希望し、死人のように精読した。

親権者の調査も終わり、鑑別期間が終了すると家庭裁判所で審判が行われた。裁判官、書記官、調査官、それに鑑別所職員が加わって行われた。本人、親、弁護士が立ち会った。教師はだれも来なかった。事実認定や要保護性の審査を終え、保護観察処分が言い渡され、イタルの親は弁護士に豪華な祝儀袋に包んだ金七拾二萬五仟圓を支払った。帰宅した日、イタルはRZDの死を告げられた。

屍骸はイタルらの事件の日、楽夏によって発見されている。南南西に向いて黄昏の光が深く差す部屋の中央に紙屑に囲まれるようにうつ伏せで斃れていて、死後数日が経過していた。時間が

止まったかのようにその眼は開いたままであった。

彼女の悲鳴で人が集まり、救急車が来る。死因は急性心不全。だれもがドラッグのやり過ぎだと考えた。イタルは帰宅したその日の夜、暗い部屋で膝を抱えてずっと考え込んでいた。微動だにしない。

鳴り続けていた電話に漸く出る。携帯電話から叭羅蜜斗の軽口を装う声が聞こえた。

「仕方ないさ。元気出せよ。それとも追悼コンサートでもやるか」

イタルは乾いてかすれた声で応えた。

「俺は普通に元気だ。」

追悼か。奴は先に逝っただけだ。今頃この俺を見下ろして驕り高ぶった嘲りの微笑を泛べているぜ。ジミ・ヘンドリックスのサインをもらっておいでくれと頼むのを忘れたよ。

唾棄すべきことだ。

自ら命を絶ったのでもない。野垂れ死にも同然の死に方だ。愚かな死だ。認められようもなく世俗の一切の価値観に異叛している。奴は純粹に逝った。そして死と云う現実をだれも超えられない。死を超えられる者はいない。だれにも触れられない。

なにを追悼すべきか。マニユアルどおりの太正解だ」

沈黙の後、普肅の言葉が漸く届いた。

「ほんとうにそうなのか。もしそうならば僕らは追悼を考えるべきじゃない」

その言葉に気を取り直したような叭羅蜜斗の軽口が入る。

「へへ、どうした、イタル。おまえらしくもない。随分と弱気だぜ」

イタルは冷たく微笑んだ。

「そうか。」

おまえの頭もかなり弱気だ」

「ちえつ、なんだってんだ。どう云う意味だよ」

普肅の声が叭羅蜜斗の難話をささぐる。

「やめろ、叭羅蜜斗。君にはわかっていない。しかし、イタル。」

君は本気でパフォーマンズだったとおもっているのか」

「コンセプトチュアルさ。形式主義的な奴さ。結局、生涯それから抜けられなかった。だが叭羅蜜斗、安心しろ、どうってことない。最初からなにもかもがパンクだからな。おまえこそが正しいふ」

イタルは電話を切った。

午前零時を過ぎた。

携帯電話の番号を押す。

「Hello, My Love ! ふ、俺だ。ゾンビさ。火炙りにされるために墓場から戻って来たぜ。敗残者、反純粹主義者、腐った死に損ないだ」

間があいた。楽夏の声が強く切り出してきた。

「ねえ、イタル。あんた、聞いているんでしょう、RZDのことよ」

「むろんさ」

「それならなんでそんなことが言えるの！ 彼を止めてくれるんじゃないの！ あんたが莫迦なことしている間に、死んじやったわ！」

「Very Very Well - done」

楽夏が息を呑む音が聞こえた。

「ねえ、まじめに答えてよ」

「なんだ」

「こうなるってわかっていたんでしょ？」

「ああ」

「それなのに、なぜ」

「皆いつか死ぬ」

「莫迦野郎！ わかっているよ、そんなこと！ そんなことしか言えないの！ いつもいつもあんたはどっしてそんなに莫迦なの！」

「Vacant さ。それっぽっちだ。まったくだ。ふ。チープだぜ。

路傍の石か」

「は？」

「死ぬ瞬間に奴はなにをおもったかな」

楽夏の呼吸が止まる。涙を啜る音がした。

イタルは考える。

『俺は奴に言った。『死ぬばわかるだろうさ』と。』

奴はもうわかったに違いない。だが既にそれをだれにも伝えられない。奴の記憶にも残らない。記憶に残らなかったことはなかったことのように感じられるものだ。

だがそれが永続すると、どう云うことになるだろうか。死はありつべかざることだ。だからありえないんだ』

そして楽夏の鳴咽が治まるのを待つ。

「イタル」

再び聞こえたとき、彼女の声は落ち着きを取り戻していた。

「ふ」

「あんたの負けね。そうでしょう？」

RZDの勝ちね」

応える。

「当然さ。そうあつて欲しいし、そう努めてもいる」

切られた。

古く汚れて擦り切れた、ヴィンテージものではないデニムのパンツに穿き替える。

「やる気になるね。リーヴァイスのポケットを留めるリベット。最高だぜ。ハードだ。そして俺がおもい泛べるのはジエームズ・デインキ。『Rebel Without Cause』。ハイな気分だな」

家の玄関から公然と出る。月が照らしていた。すべてが白と黒とで静止している。両親祖父母はともに寝静まっていた。警戒されていないことを不思議と当然のことのように感じた。あたかもシッダルタが城を抜け出した深更、父王も家来も侍女もだれもが眠りに沈んでいて気がつかなかった故事に似ている。イタルの唇が微笑のかたちを倣した。
アルカイク・スマイル

「俺は死ぬのではない。炸裂する。まだ死ぬべきじゃない。死にたくもない。ふ。死だ？　ありえない」

秋月とちぎれ雲との上空では風が強いらしく、霜降のように照らされた道は頻繁に翳された。畦道に方形に区切られた水田は鏡面のようだった。田舎路に人気はなく、清々しかった。楠の老大樹の下に風雨に磨耗した道祖神があり、路がそこで分かれる。壱之本家の大屋敷が山を背にしていた。そちらに歩が進む。イタルは黙然としたまま、とりとめもなく考えながら肅々と歩いた。「俺は考えている。言語を超越した思想だ。諸概念にはあて嵌まらない。『智慧は女だ。智慧は戦士を愛する』」

フリードリッヒ・ニーチェか。至言だぜ」

身体から燐のような炎が燃え立つ。一步一步踏む度に立つ砂埃が火焰のようでもあった。瓦の聳える屋敷を迂回し、真神山の麓に着いた。真神郡一帯で最も崇敬され、神聖視される霊域だ。山の頂に見上げる月光が浩々と凄い。真神山は山と言えるほどの高さではなかった。海拔百数m

しかし山頂には巨大な磐代がある。磐には上から下までアルファベットのI字形の亀裂が走り、その姿形が元龍に似ているところから地域の龍神信仰と古代から地元の趨勢であった彝之家いりやうのれつにちなんで彝龍之裂と呼ばれていた。昭和五十八年からの調査で四世紀の蓋や甕の土器片や土偶など祭祀の跡が発見されている。圧倒的神威を以て石刀のように縦に簞ざる大磐は高さ八mであった。

いく千年も人はここで祈ってきたのだ。豊饒と神の怒りの慰撫と繁栄とを。人が死にたくない、すなわち個体としての自己の存続を望むのは子孫繁栄への生存の原理が働くからである。まず先の個体が存在しなければ次の個体に続かないからだ。しかし時に人は我が子や恋情のために自己の生命をも犠牲にする。このことは先叙の個体存続欲と矛盾しない。すなわち子孫の繁栄に繋がるからである。ましてや子孫への志向を個体としての自己の超克と考えるならば、なおさらその行為は正統的である。

人が自己犠牲や死を懼れぬ態度に本能的に崇高さを感じるのは全存在者に命題として自己超克が刻まれているからである。歴史に残らぬ人たちが実際にここで祭祀を行っていたと云う事実におもいを馳せるときにもまたこれと同じ原理が働く。イタルは今彼を衝き動かすものがどこか自分を超えたところから来ているような気がしていた。

雑木の小枝をかき分け、草を踏み分ける。自分自身を脱ぎ捨てよう欲してあがきもかくのかごとくに歯噛みしながら、噴く汗が火の粉と舞うほど我武者羅に登る。海島島の城塞都市アルカサルアルカサルの喧騒が聞こえ始める。

頂上に立つて大磐を見上げた。イーリヤの幻想が鮮やかに翻る。磔刑を見上げていたときの自分を思い出す。

彼女が牽かれ出ると怒号交じりの歓声が上がった。無責任な大衆の怒り、憎しみ、それは残忍で恐るべきものだ。庶民の憤懣や僻みや嫉み、辛酸と屈辱とを舐めさせられ続け、虐げられた人間の心にある捻じ曲がった復讐根性。冤罪であるか否かは問題ではない。裁きは溜飲を下げさせるのである。民衆にとって公開処刑は格好の見物、娯楽でしかない。

蒼穹を背景にイーリヤは磔にされた。

黒い油がバケツ数杯分撒かれ、点火される。一瞬で爆発のように燃え上がった。群衆の声はさらに烈しく、波浪のようにうねる。煙が丘の上の強い風のために斜めに流れる。この場所が選ばれるのは煙ですぐに窒息死させないための工夫だ。窒息死できないとなると人間は炙られ

続けることになる。人間は焼かれただけではなかなか死ねない。骨が露出するまで肉を炙られても死ねない。絶命に至るまでは凄絶な場面が繰り返されることになる。

彼女も炙られ始めは身をもととさせるだけであった。それでもかなりの熱さを堪えている。

だが炎が二m弱に近づくと縛られた手足を引きちぎろうとするかのように激しく上下に悶絶した。髪が縮れる。叫びが上がった。凄絶な表情。炎がイーリヤの足尖に届く。もはや彼女の動きは常人のものではなかった。意識を失う。だが一瞬だけだ。あまりにも熱いために意識が戻る。その間一秒もない。意識が戻った途端、弾かれたように身を仰け反らせ、絶叫。凄まじい熱さで意識を喪失。飛び跳ねるように意識を取り戻す。狂ったように叫ぶ。失神。これがいく度もいく度も繰り返された。人間の光景ではなかった。

イーリヤの着物一片が火の粉となつて胡蝶のように舞いながらスローモーションでイタルの顔に落ちかかる。彼は右手で払った。そして叫んだ。

数人の刑事がイタルを押さえる。彼は虚脱を、私をしつと眺め、言った。「そして俺は拿捕を免れようと身を牽き千切るように暴れ、益々躍るよう叫び続けるんだ」

贅沢なお世辞を言ったかのように豪奢な憂いの微笑を泛べてみせる。

私の喉がからからに干乾びるまで容赦なく叫びは続いた。なにかが膺下丹田から顫頂骨を抜け、爆裂の嗤笑となる。イタルが嗤笑していた。砕け散るシンバルの燦々たる響きのような哄笑であった。嘲るような、媚びへつらうような、下卑て、理性を喪ったかのような凄まじい哄笑であった。唾液を垂らし、這いつくばるような、天翔け裂けるかのような、けたたましい哄笑であった。まるで残虐な食宴だ。

炎が磔の尖まで上がった。

彼女の踵の肉が焼かれ、骨が露わになる。着物は焦げ縮れたぼろ屑となり、髪はないも同然、もがき方も猛烈で、既に正気ではなくなっていた。それでもまだ死ねない。人間は骨が露わになるまで焼かれてもまたまだ死ねない。

火炙りにされる者の最終的な死因は心不全だと謂われている。

「人間は真の意味で死を覚悟することはできない。

そうじゃないか、蠢龍之裂、無情な古代の神。今おまえは物憂げな侮蔑の眼差しで俺を睥睨している。その嚴肅さは驚くべき強大さを持ち、轟音で揺るがすかのようだ。あたかも宇宙の巨大

な沈黙のように威圧する。

人間を根底から畏怖させるその凄まじさよ。俺たちはなんて儂く、無力で愚かなんだ。

死だ。それが生の全てだ。死を覚悟できないと云うこと、それが生だ。

たとえ精神が是と言ったとしても、細胞の一つ一つが疾風のように全力で絶叫し、猛反発するだろう。死を択んだ人間が（むしろ崇高なる目的、強い正義、清廉なる理由であった場合を除くが）その瞬間に、こんなことをすべきではなかったと後悔してなどいないとだれに言い切れるだろうか。

だから俺は死にたくない。承知で敢えて死んでみせる者がいたとしたならばそれは生存に打ち勝ったと言えるだろう、と言いたいところだが、矯激さは生存の発露の一種ではない。生存を超越したことはない。駆られた天邪鬼に過ぎない。生存の命題のうちではない。それの範疇内でのあがきではない。だがなぜ勝とうとするのか。阿呆だぜ。

ふ。

俺たちは勝てない。

だから、轟龍ノ裂よ、おまえのために敢えて英語で言つてやるぜ。

Sooooooooo Whaaaaaaaaaat!!

磐は安坐して黒々と聳え、手のかりの全くない絶壁を傲っていた。その頂上までイタルがいかにして這い上ったかはだれにもわからない。ガソリンを振り、ライターを点じ、絶叫とともに炎となつて中向きに墜ちた。